

# 写真図版

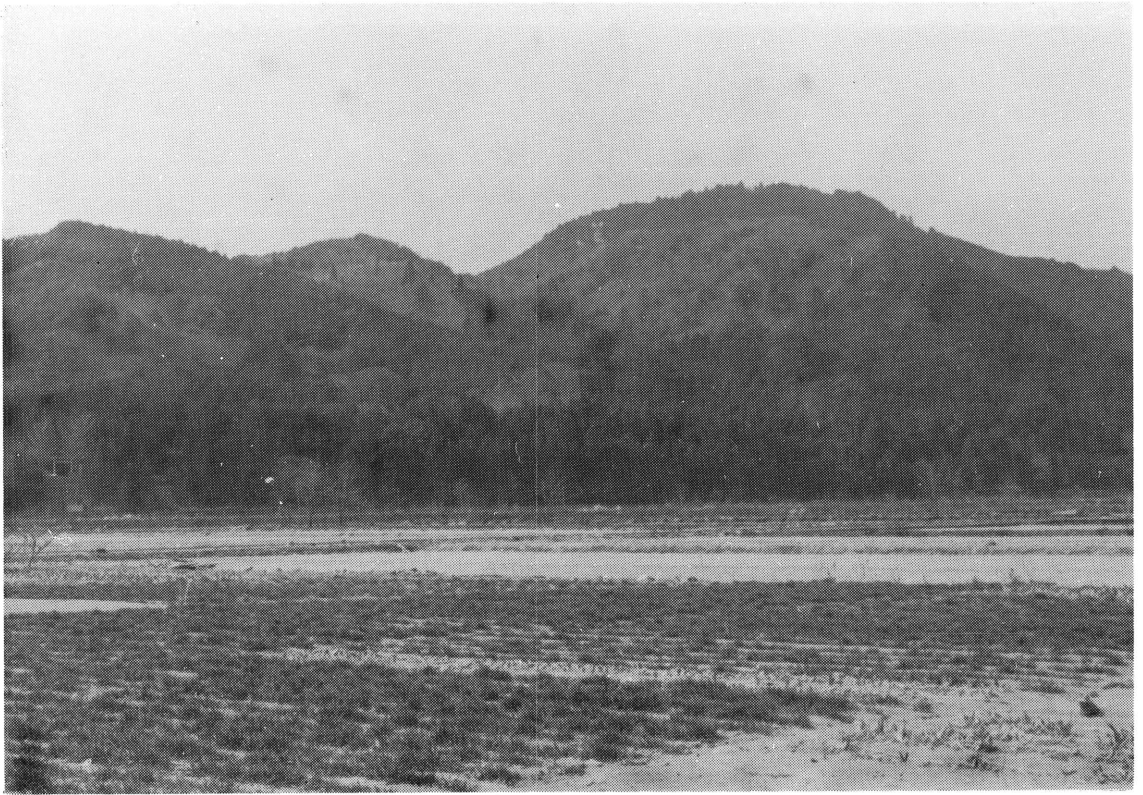


東上空約 400mより (右 羽黒山 標高 458m)



東上空約 250mより (中央 台地突出部が遺跡)

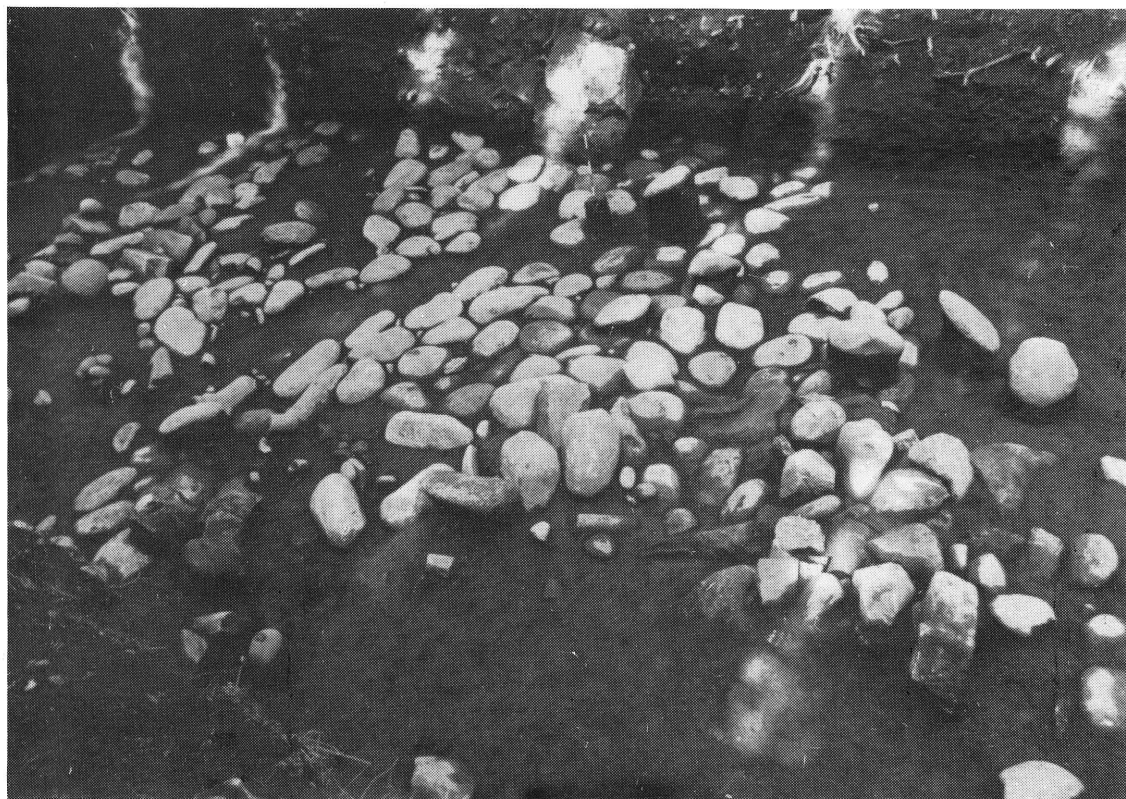




遺跡近景 東より



炉 跡



1号配石（南西より）



1号配石（南より）





1号配石部分（左 A 配石，右 B 配石）



1号配石部分（手前 C 配石部分，遠方 D 配石）



1号配石 石棒出土状況



1号配石 垂飾出土状況





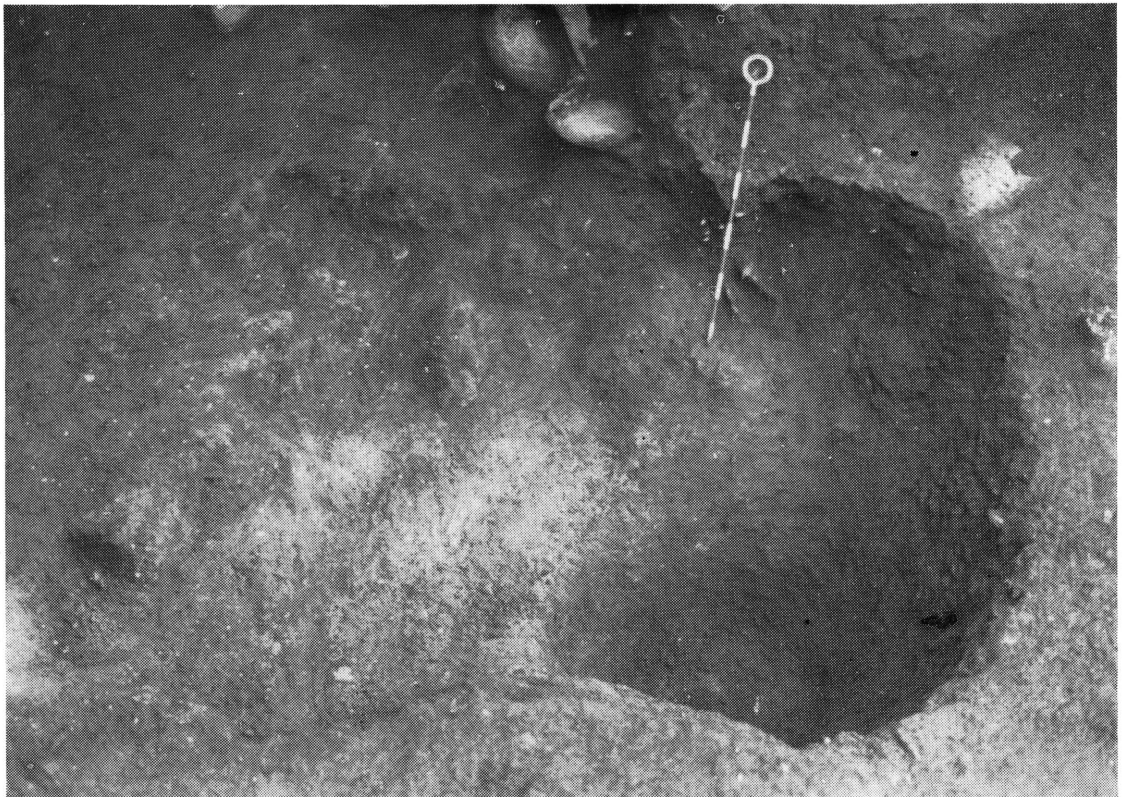
1号配石上土層断面状況



2号配石と1号・2号土器埋設遺構（右側が1号土器埋設遺構）

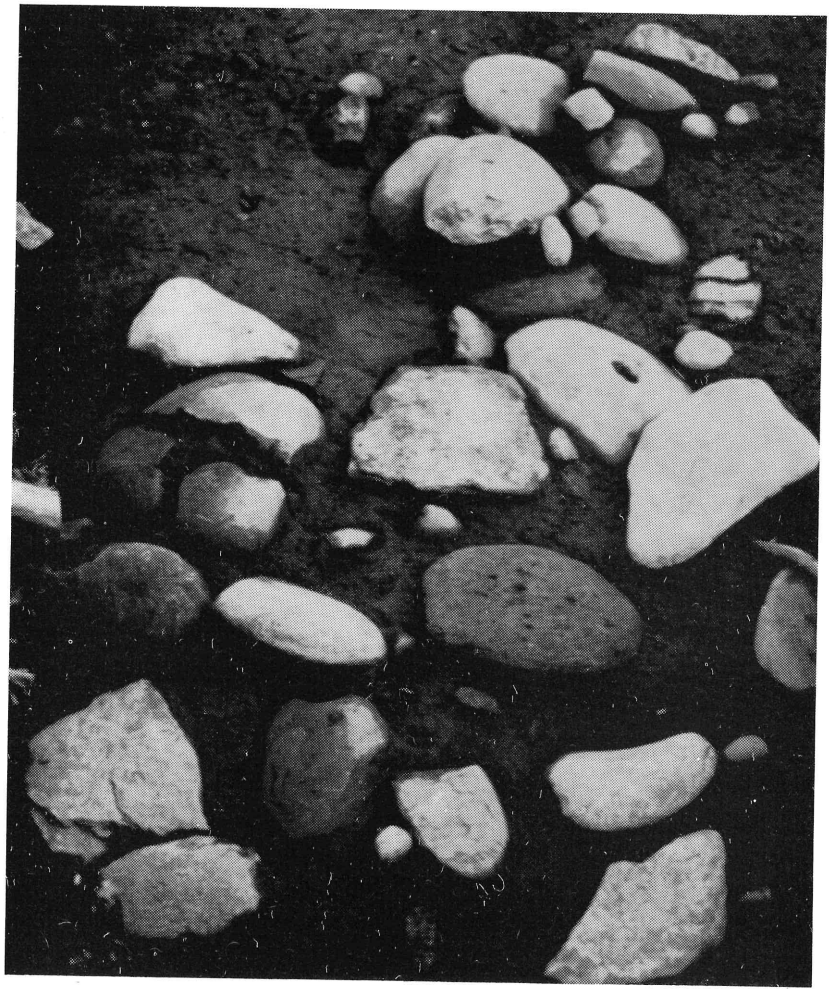


3号配石



3号配石下ピット





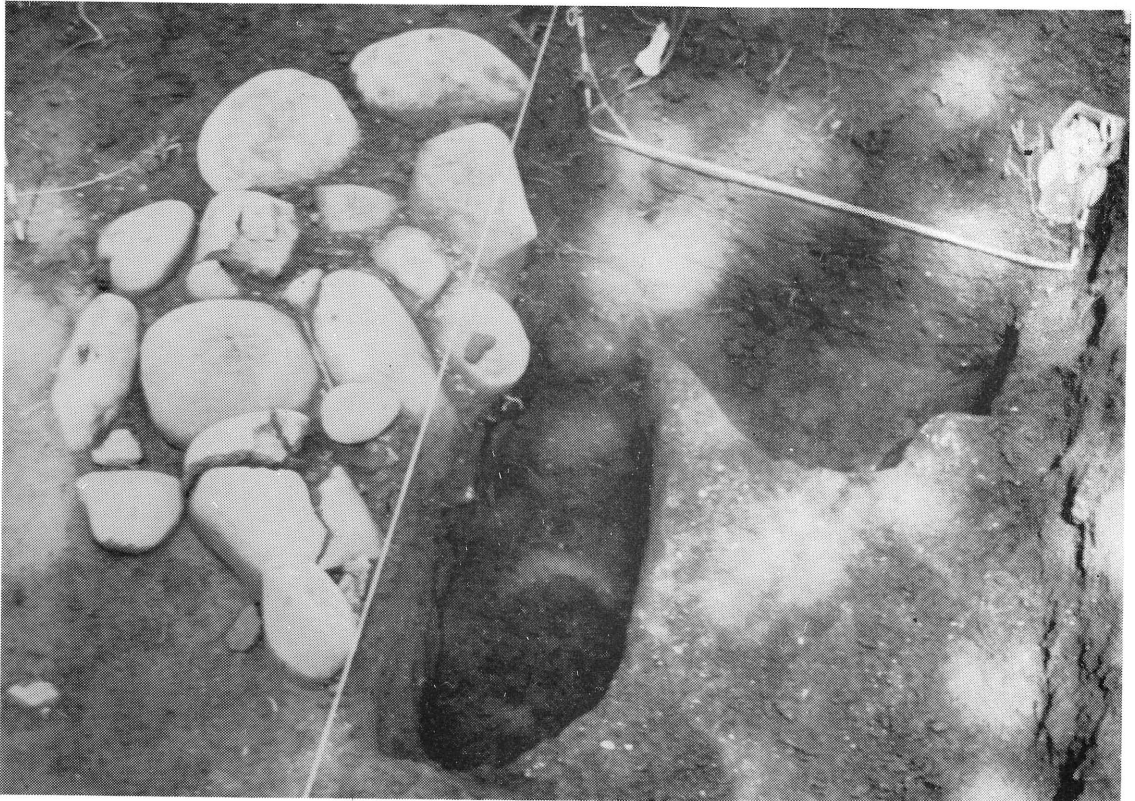
4号配石



4号配石下ビット



5号配石（西より）



5号配石下ピット

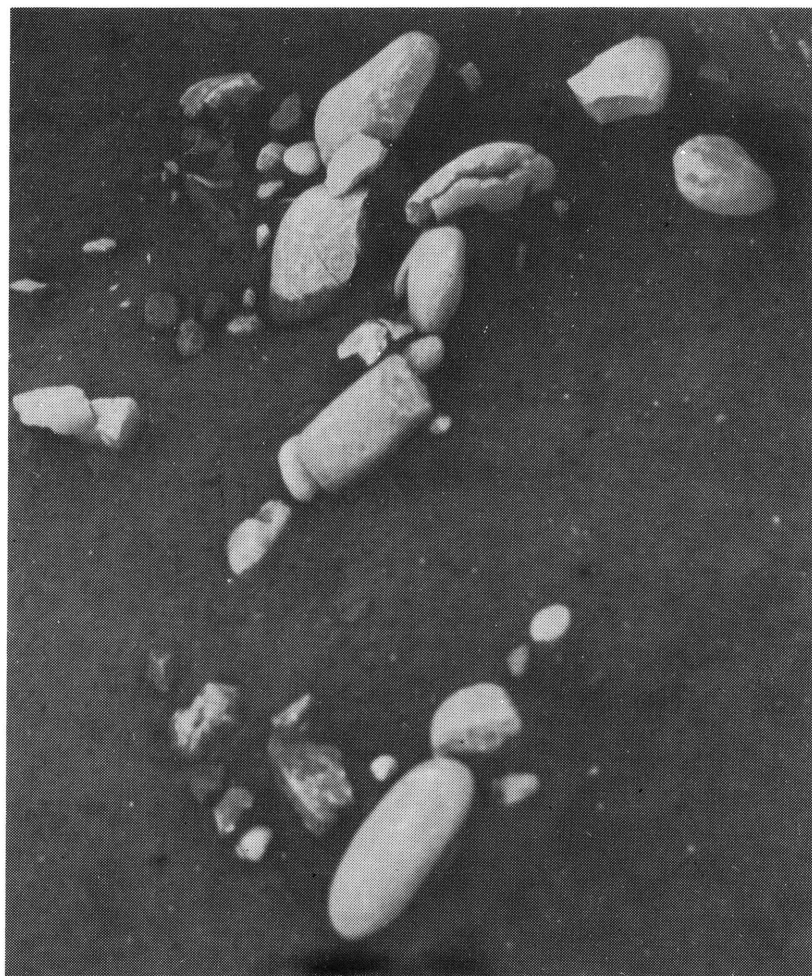




5号配石(手前), 4号配石(遠方)



5号配石西垂飾出土状況



6号配石（東より）



7号配石（南西より）





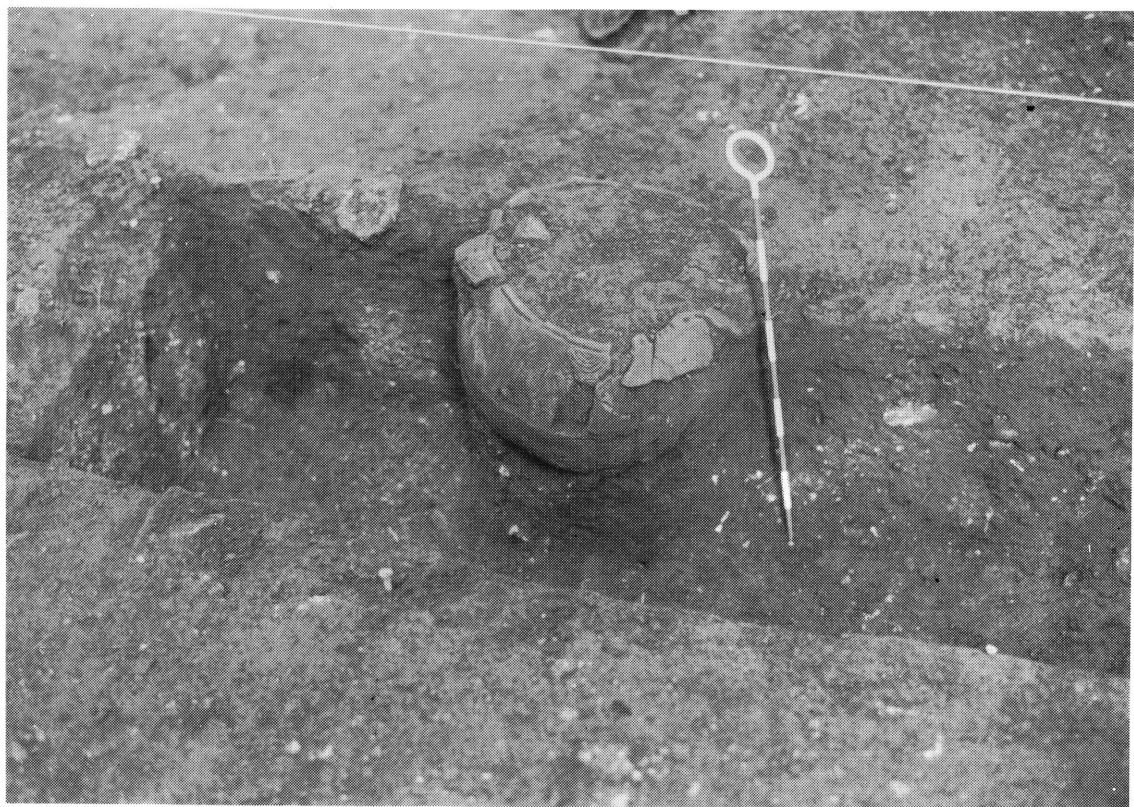
1号土器埋設遺構



同上埋設状況



2号土器埋設遺構



同上埋設状況





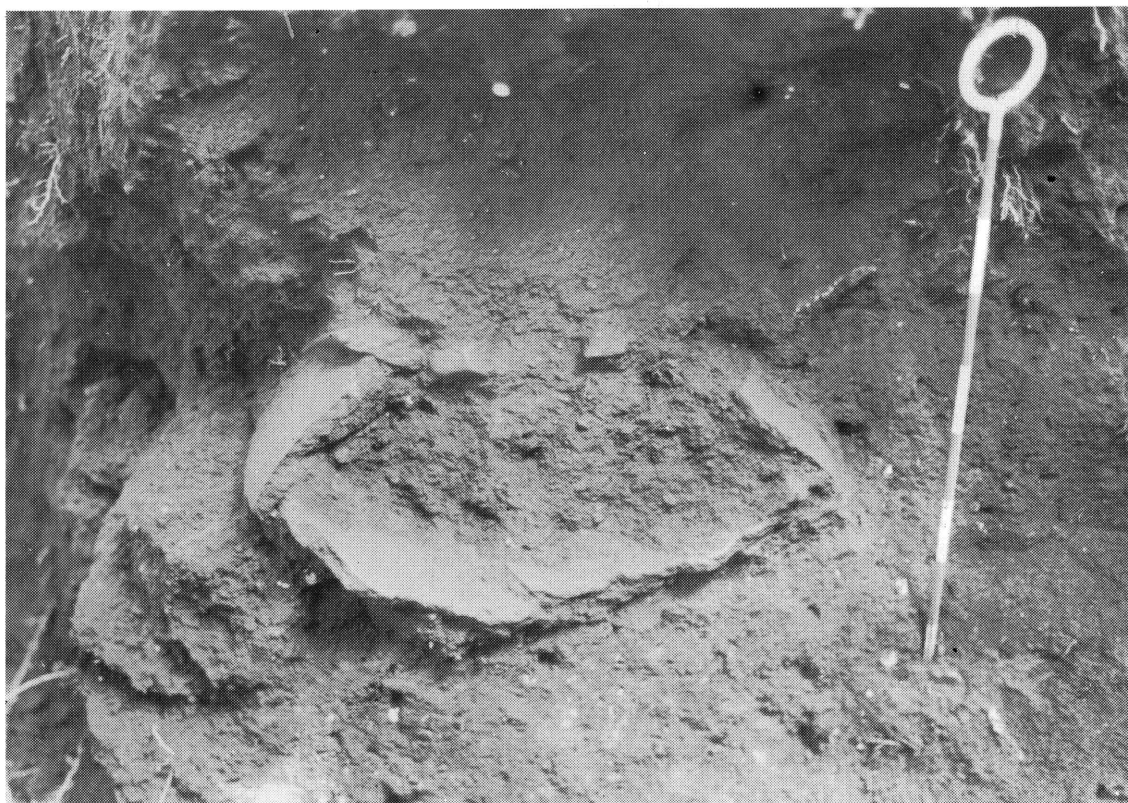
3号土器埋設遺構



同上埋設状況



4号土器埋設遺構

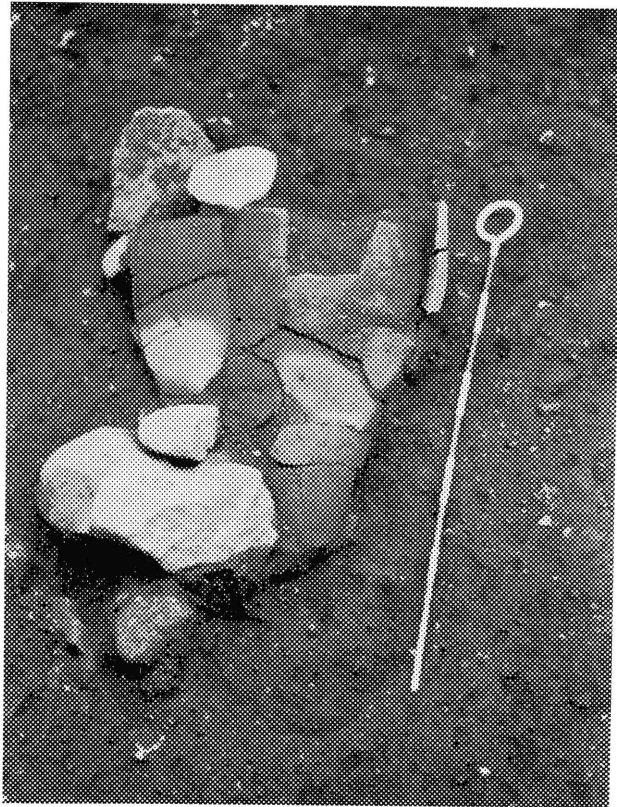


7号土器埋設遺構





阿玉台式土器出土状况



9号土器埋设遗构



ピット群検出状況（手前左P23，同右P13・14，中央P7・8とP11・12，北より）



ピット群検出状況

（手前より P5・16，3号配石下ピット，P10，P7・8，P9，P11・12，P23 南より）





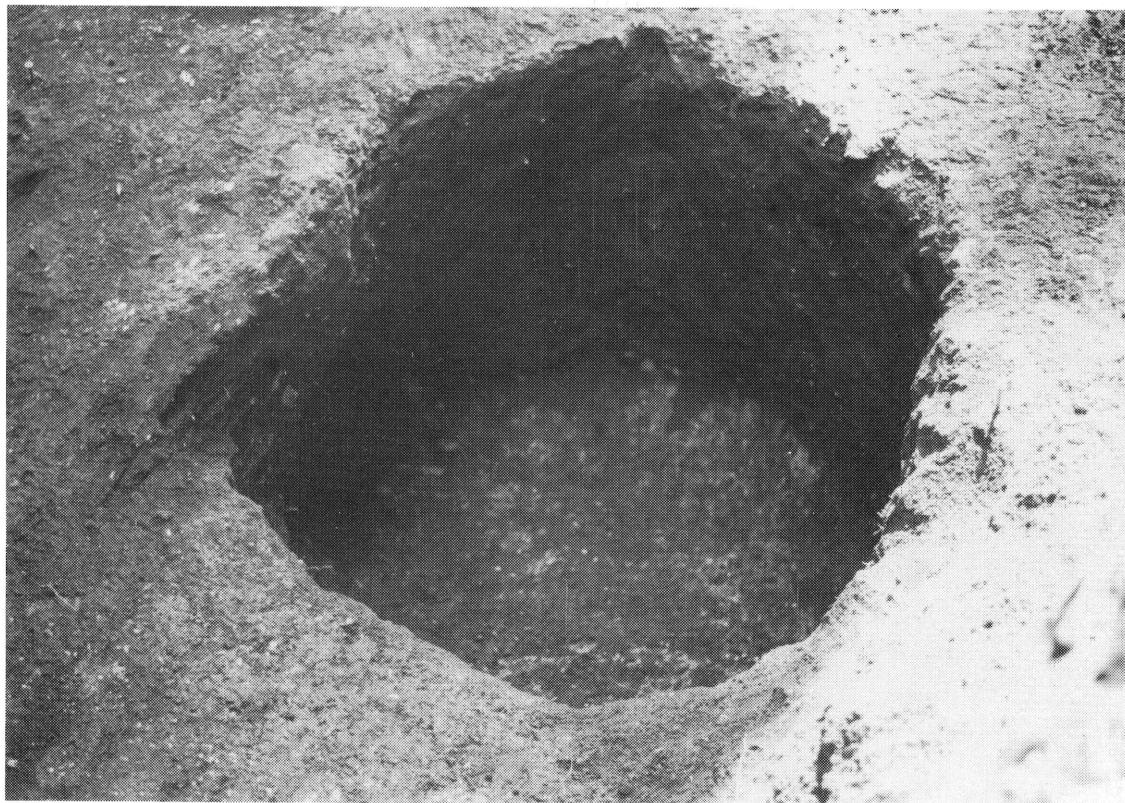
ピット検出状況（P13・14，南より）



ピット検出状況（P16・15，北より）



ピット群検出状況（手前右P4，左P3，中央左寄P1・2，北より）

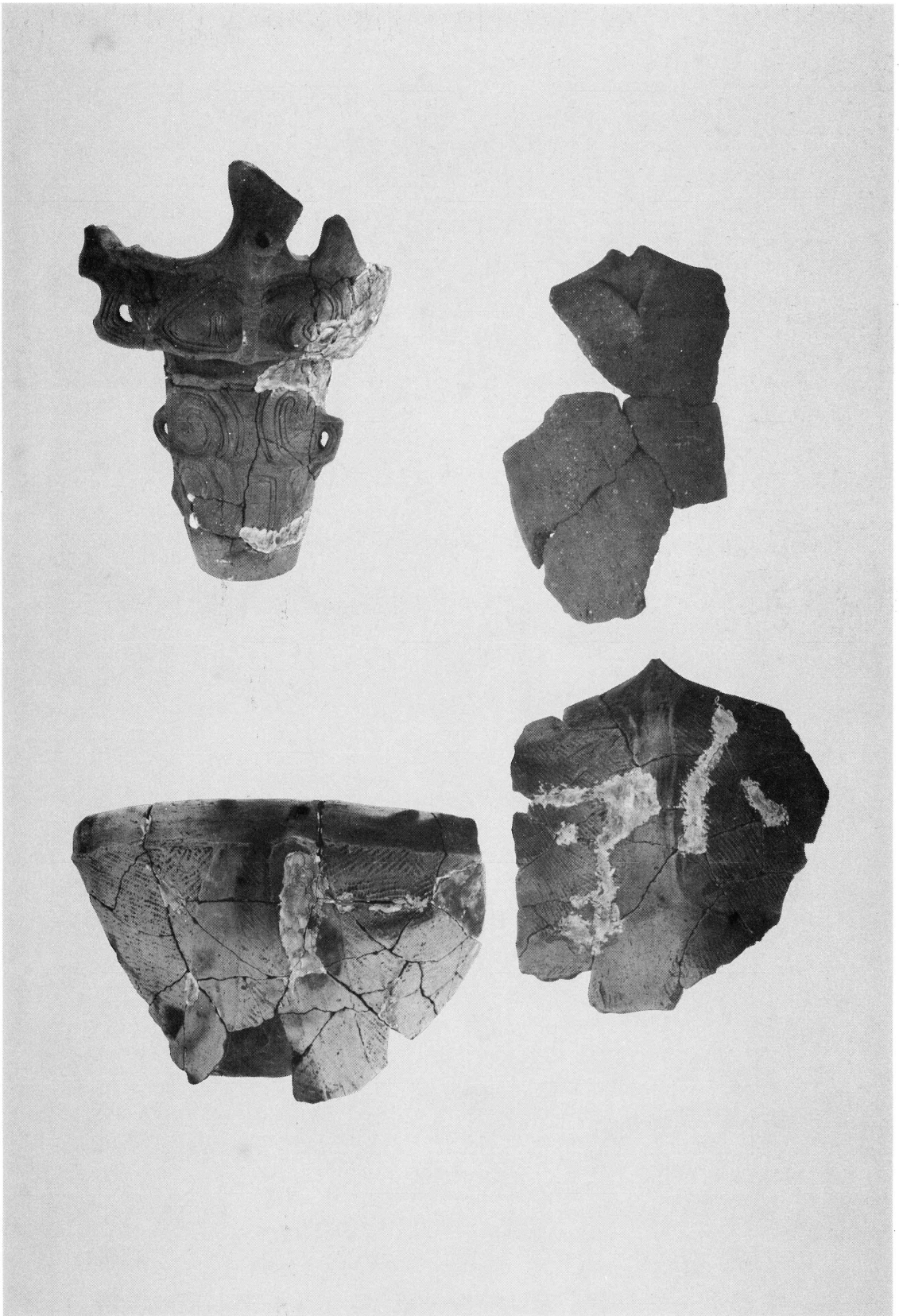


ピット検出状況 P4（西より）



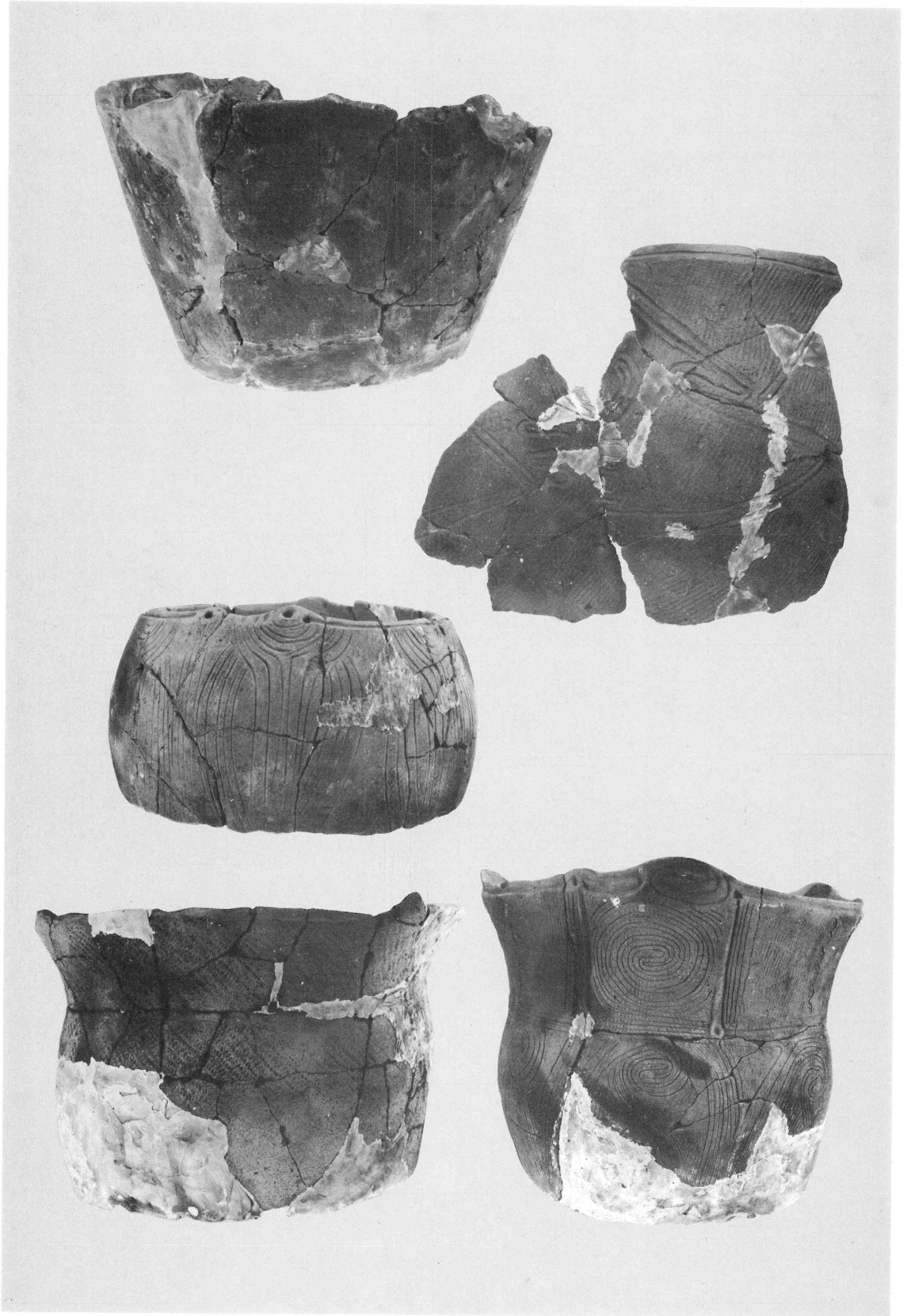


発掘調査風景

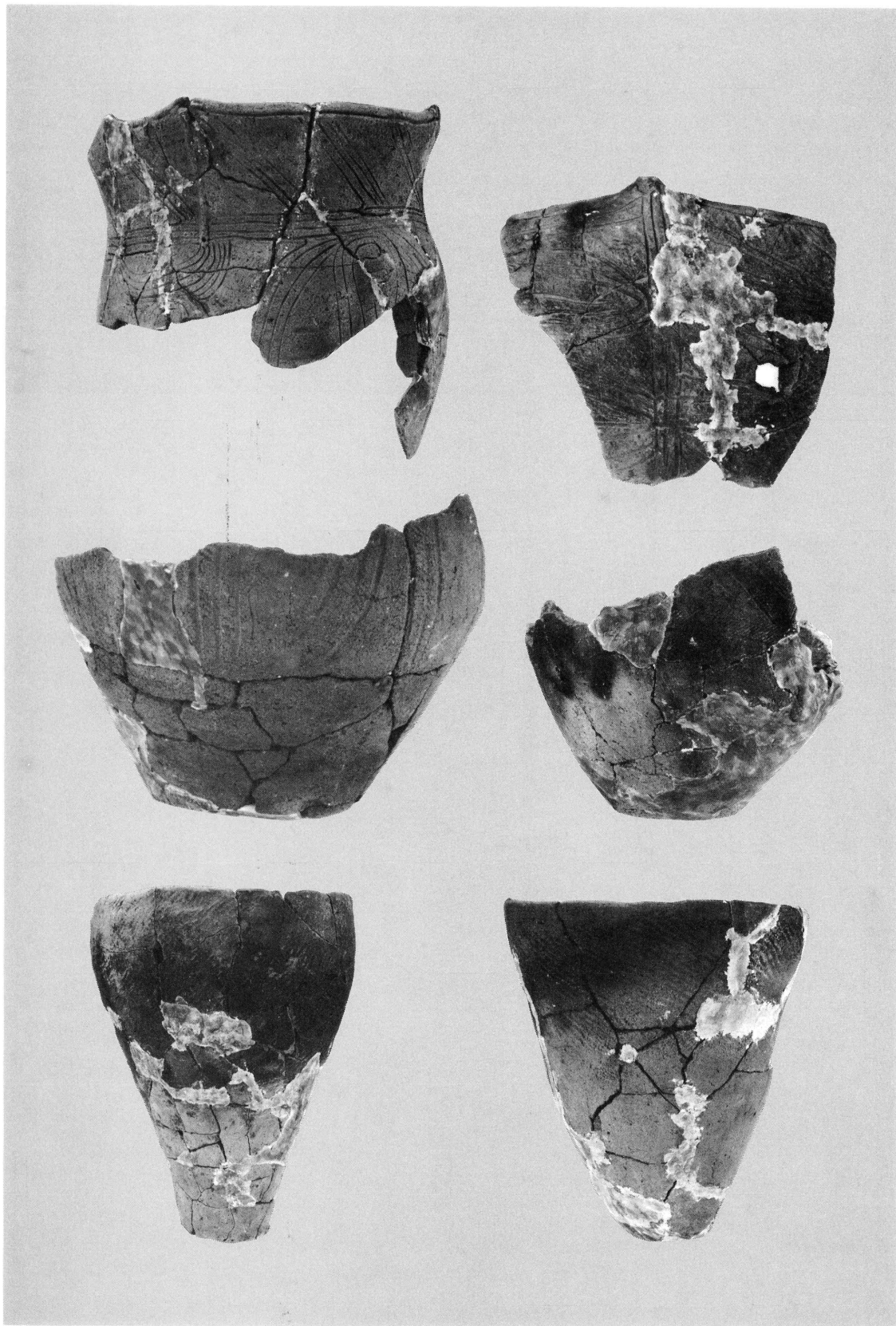


縄文時代中期の深鉢形土器



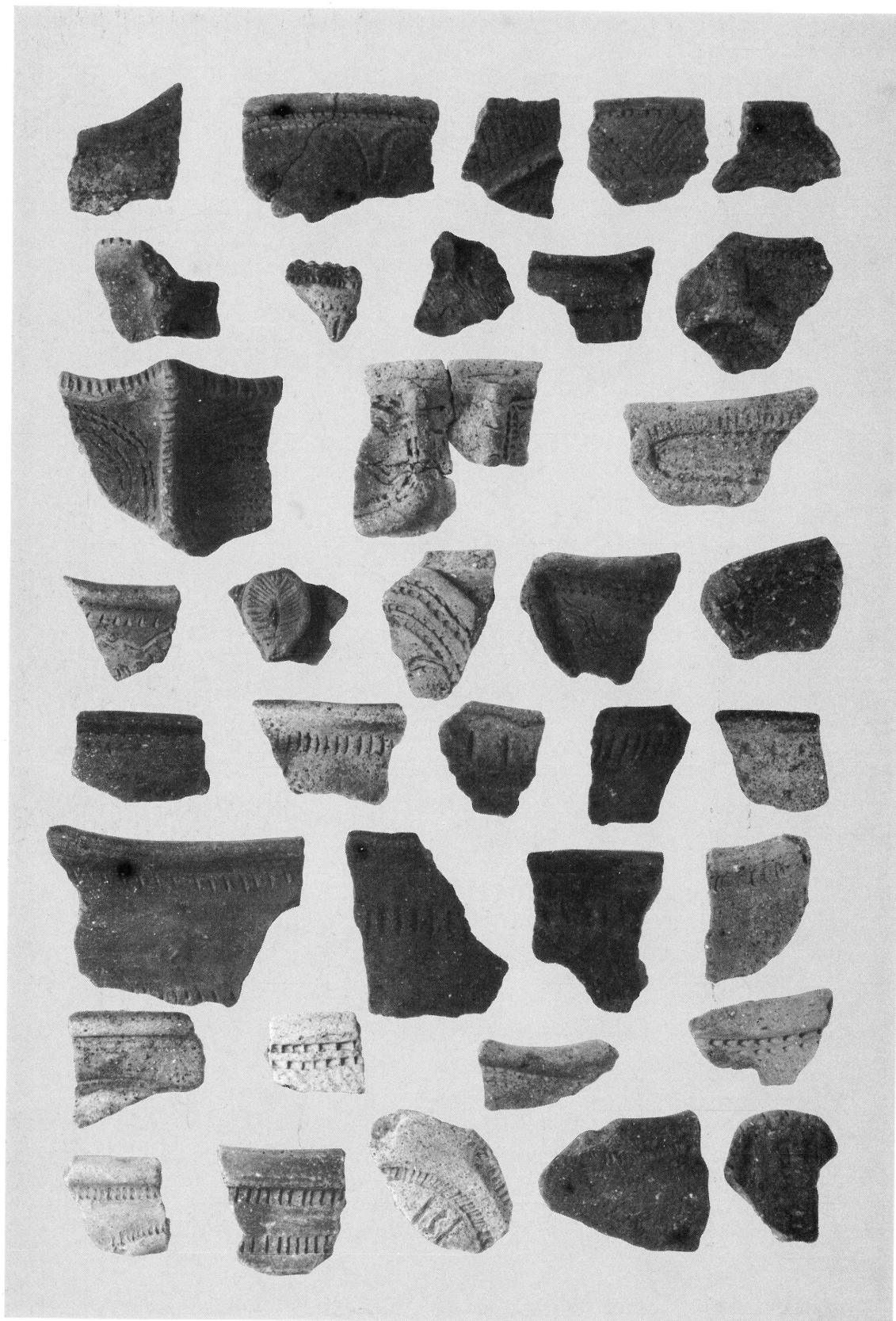


縄文時代後期の深鉢形土器 (1)

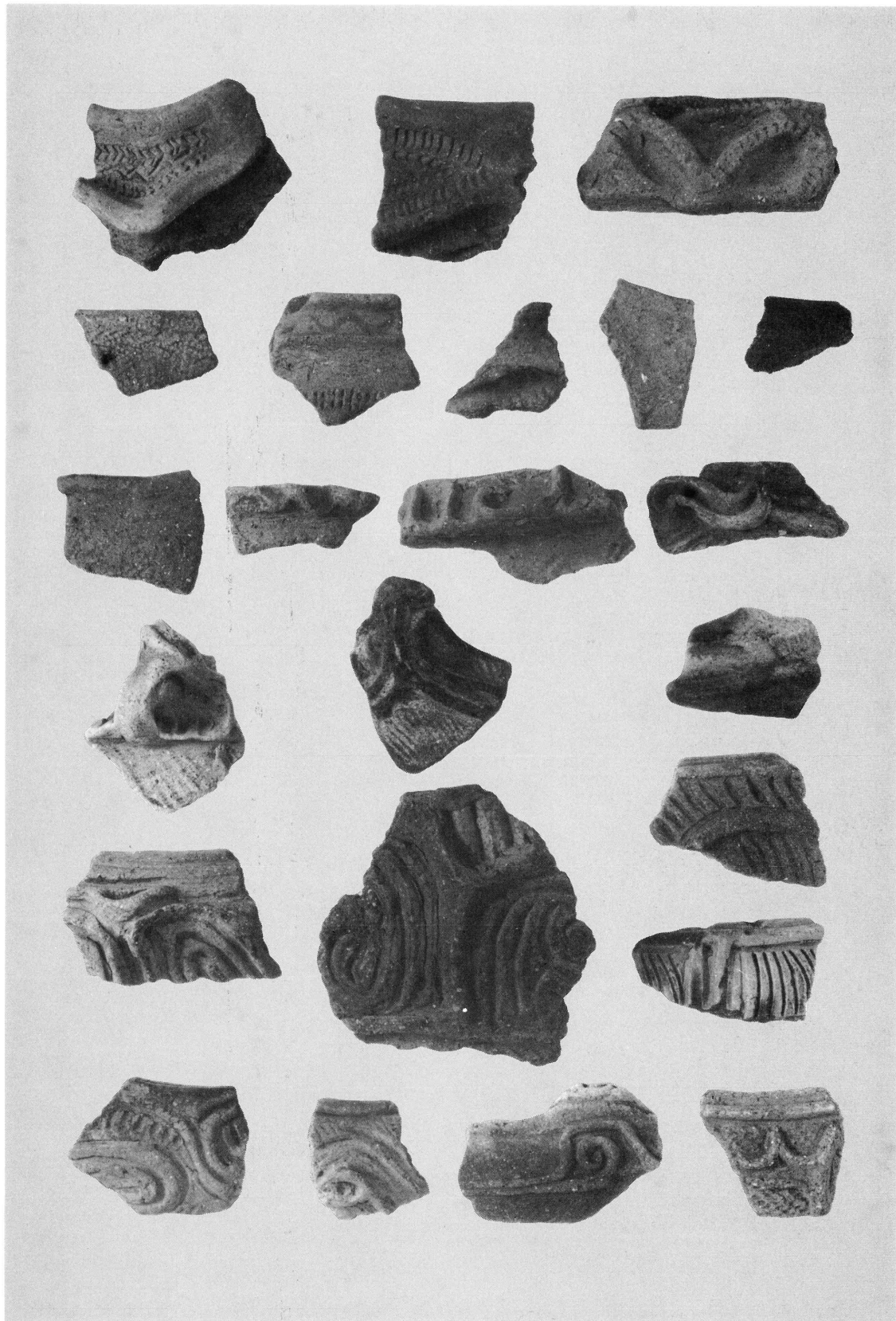


縄文時代後期の深鉢形土器 (2)



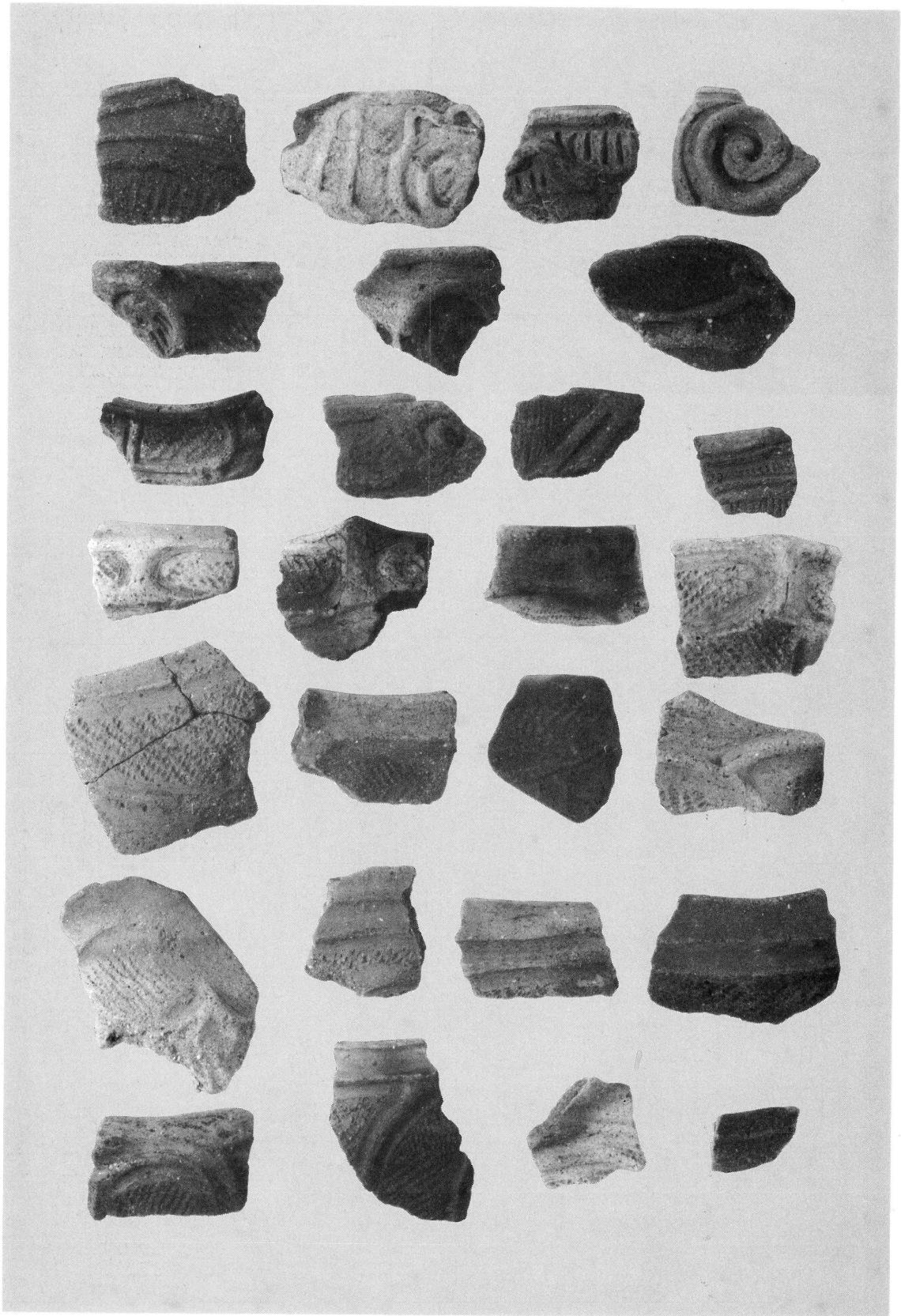


縄文時代中期の土器片 (1)

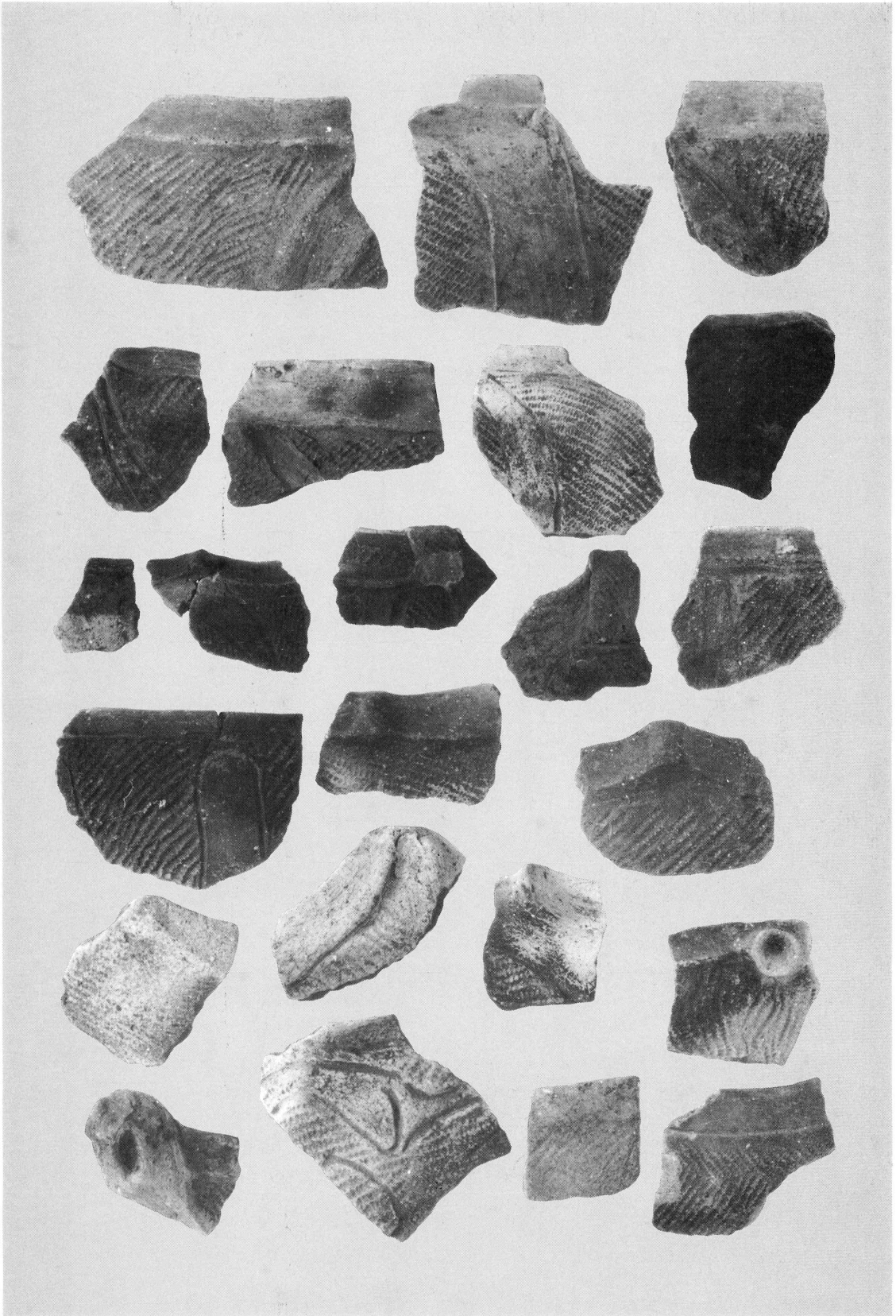


縄文時代中期の土器片 (2)



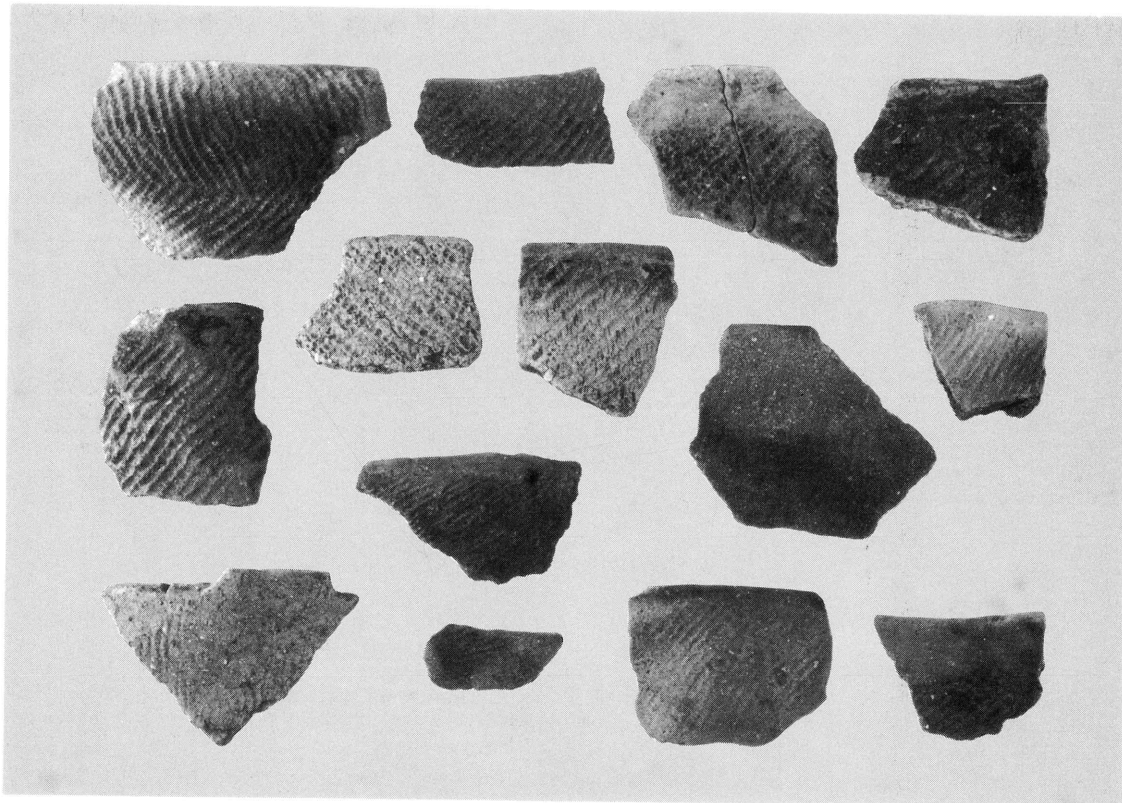


縄文時代中期の土器片 (3)

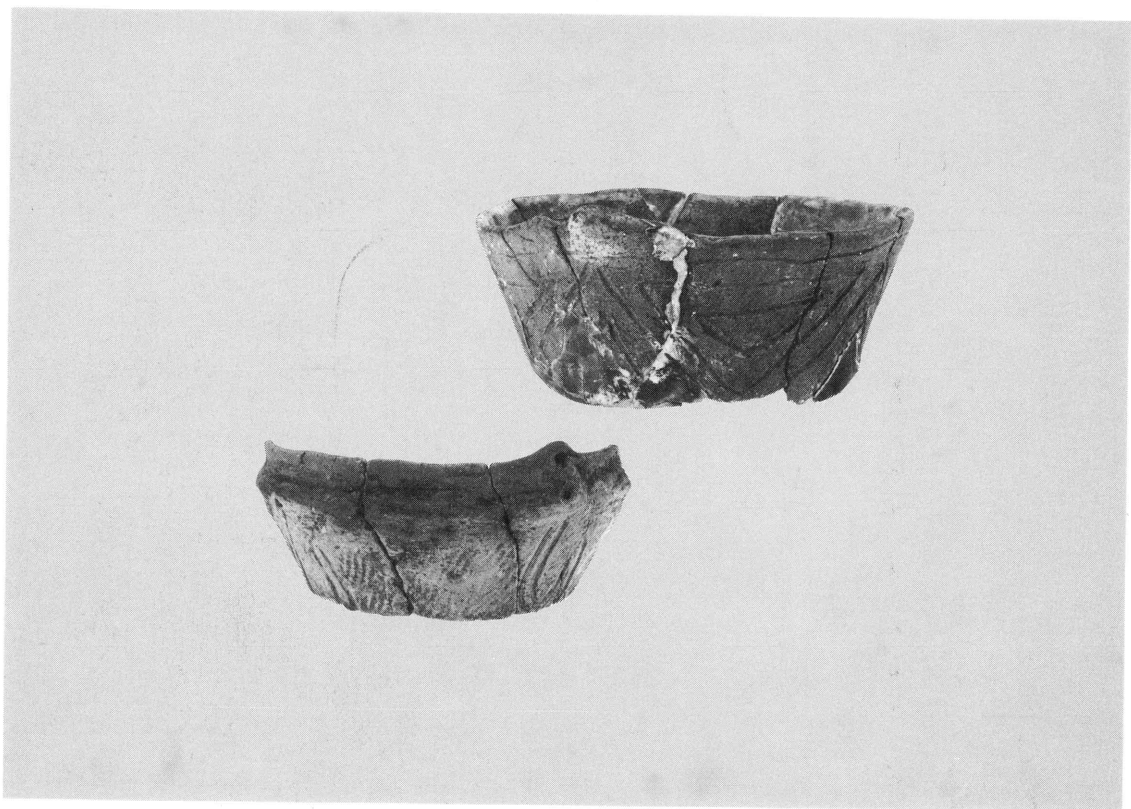


縄文時代中期の土器片 (4)

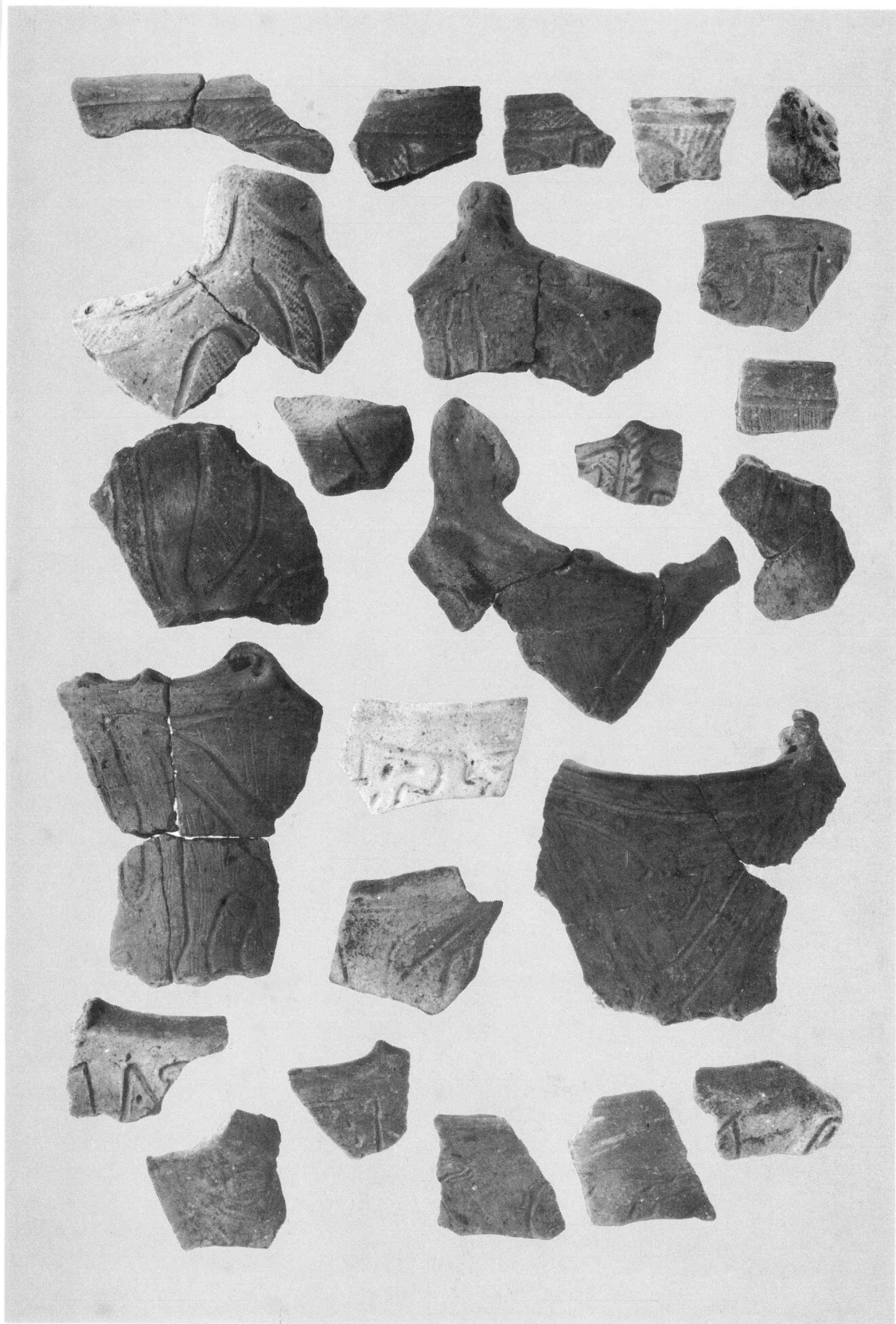




縄文時代中期の土器片 (5)

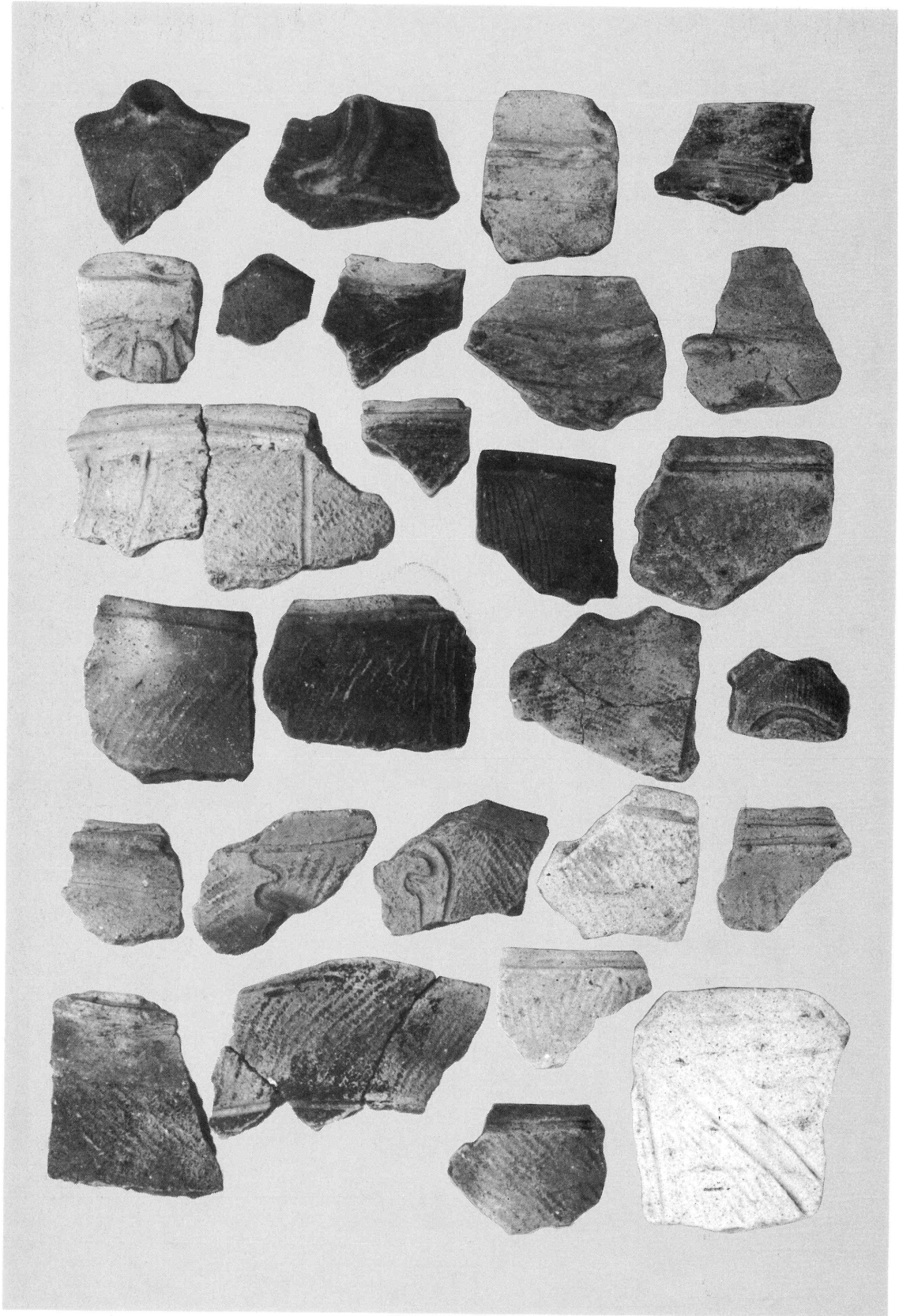


縄文時代後期の土器 (1)

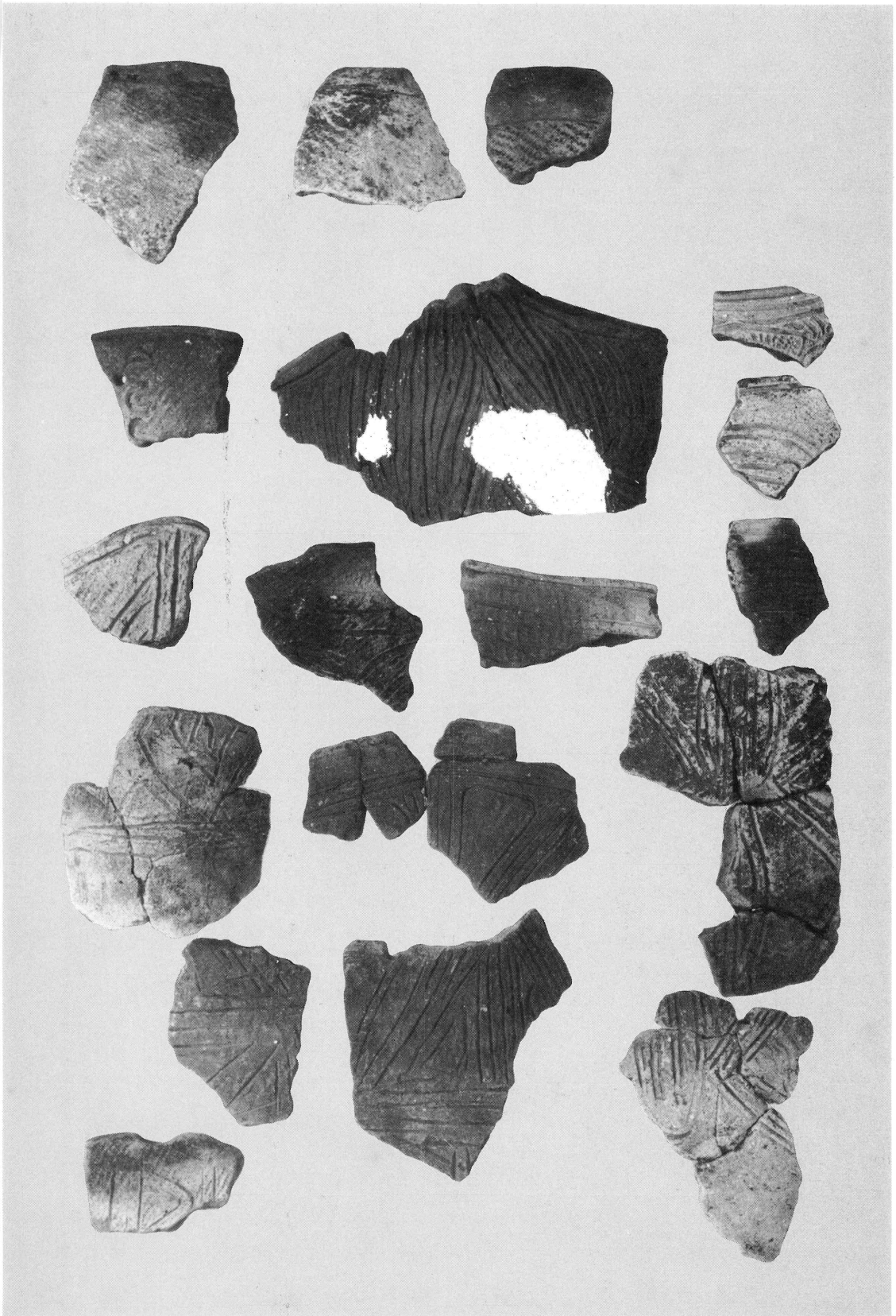


縄文時代後期の土器片 (2)



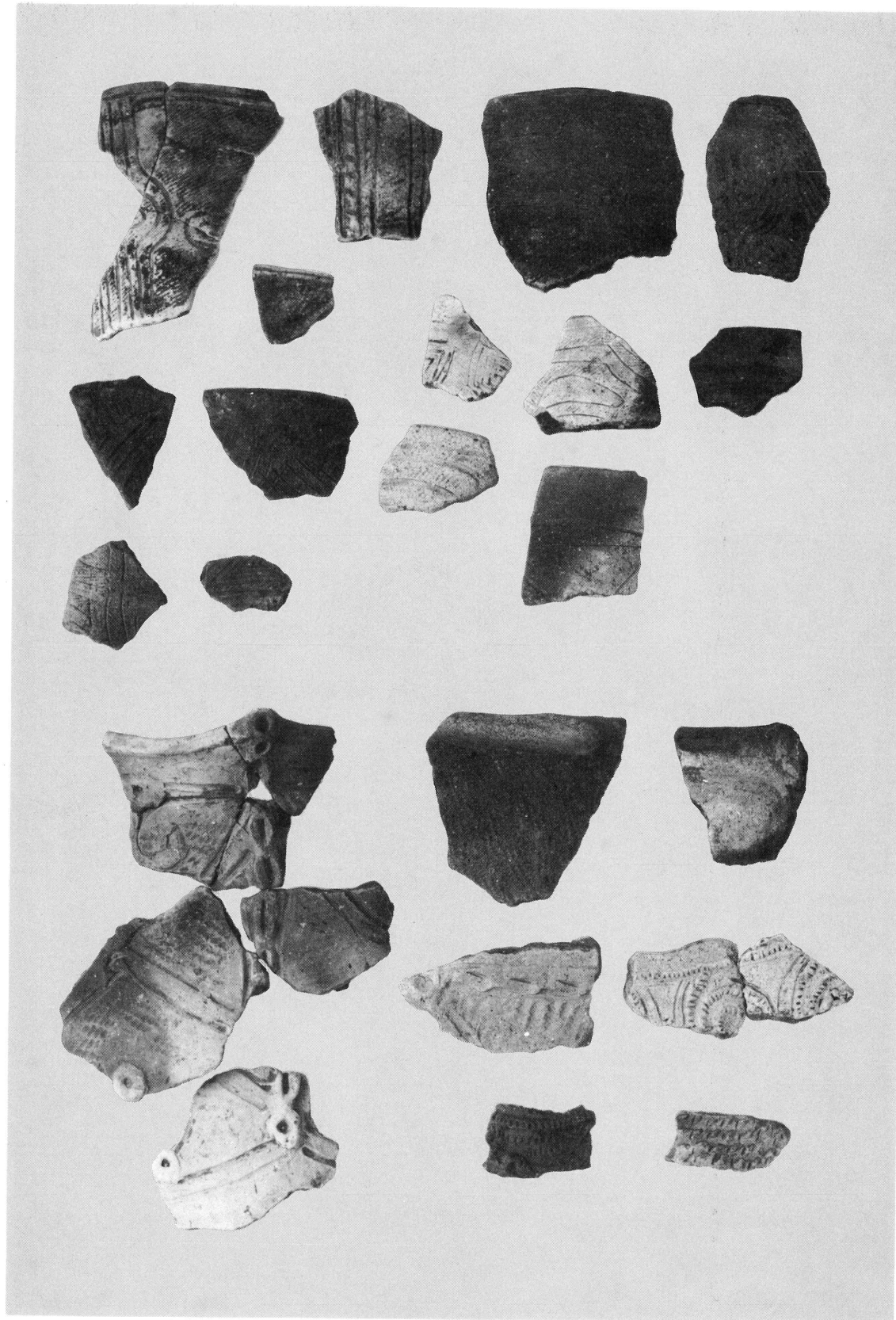


縄文時代後期の土器片 (3)

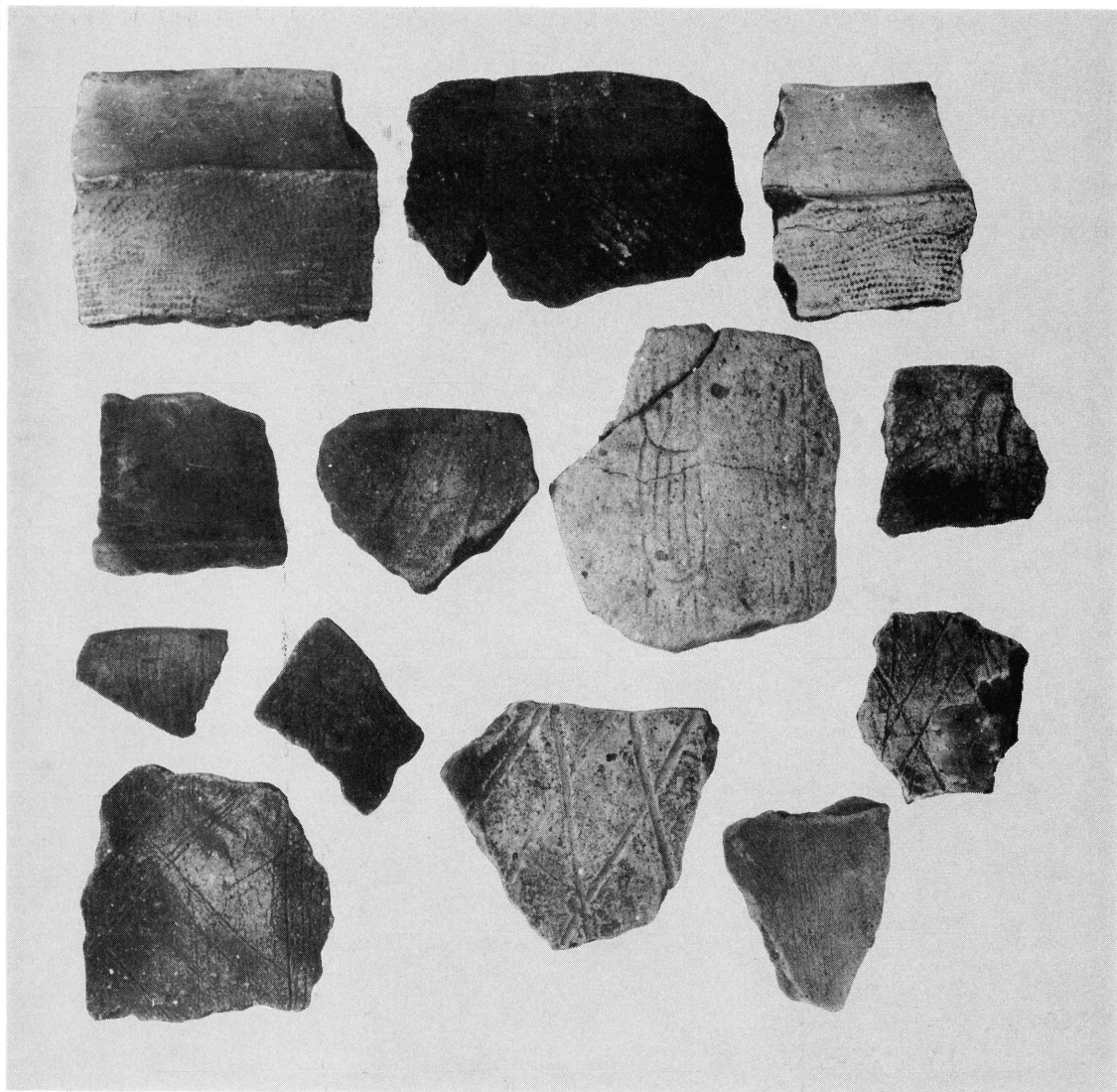


縄文時代後期の土器片 (4)



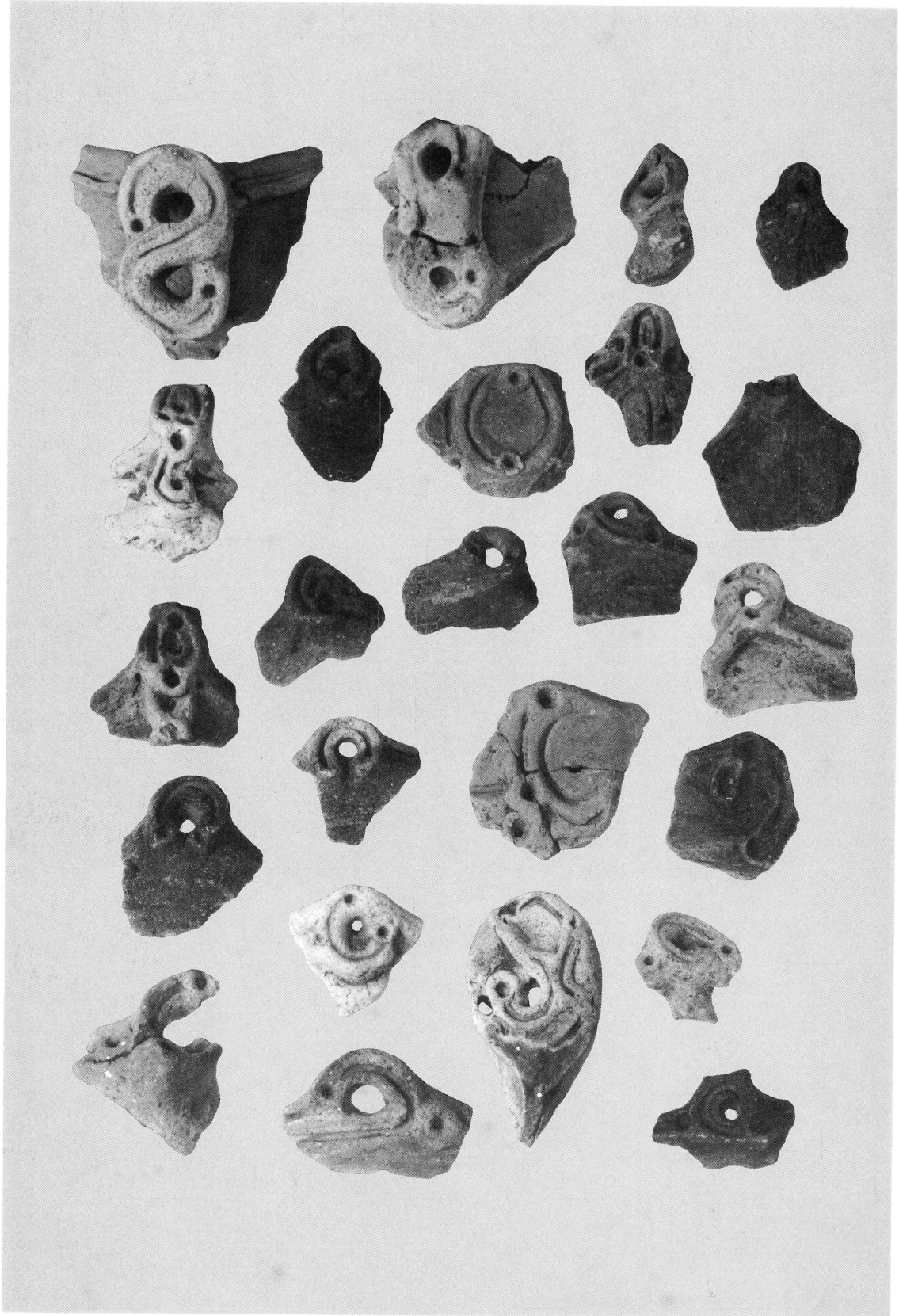


縄文時代後期の土器片(5)

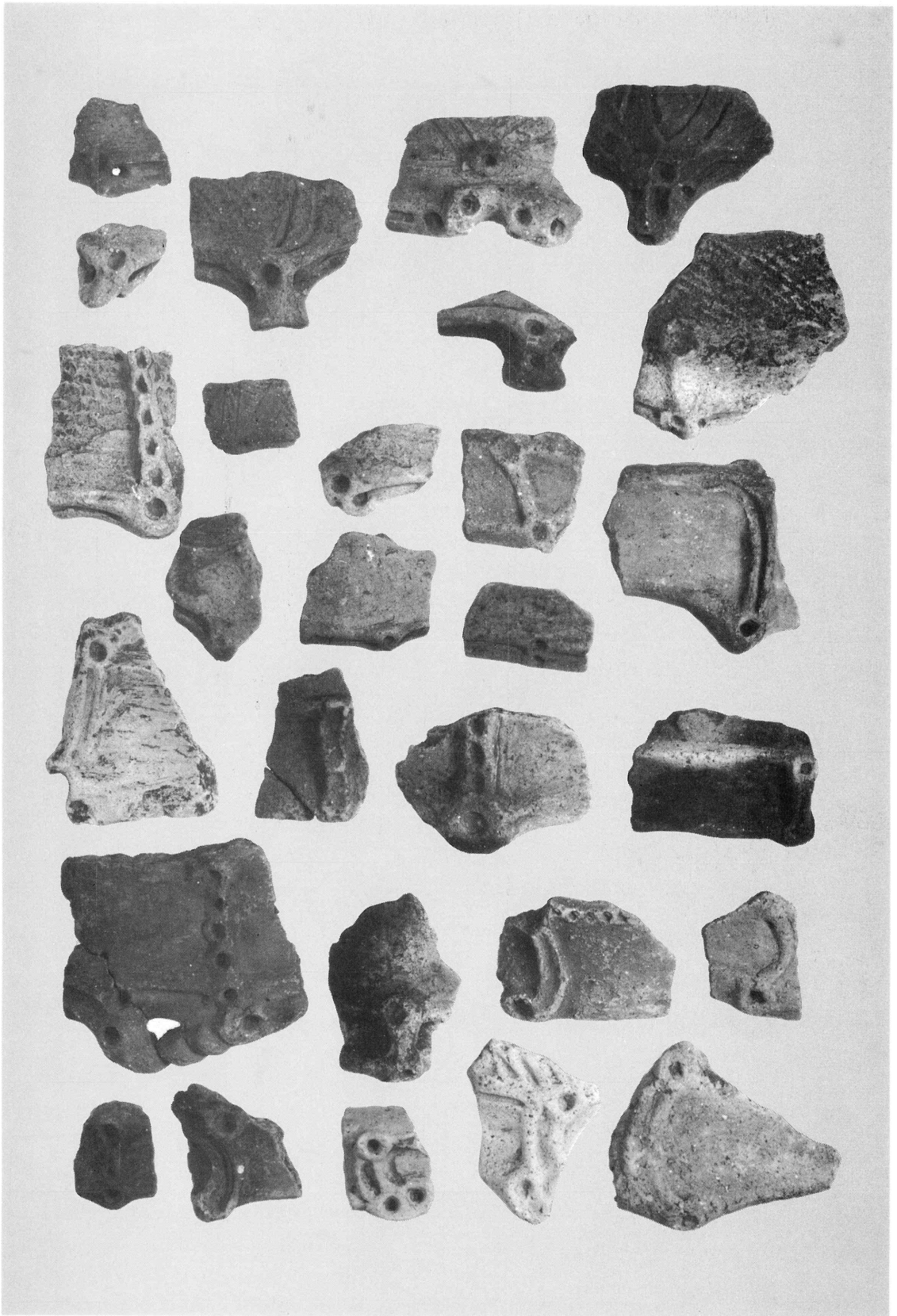


縄文時代後期の土器片 (6)



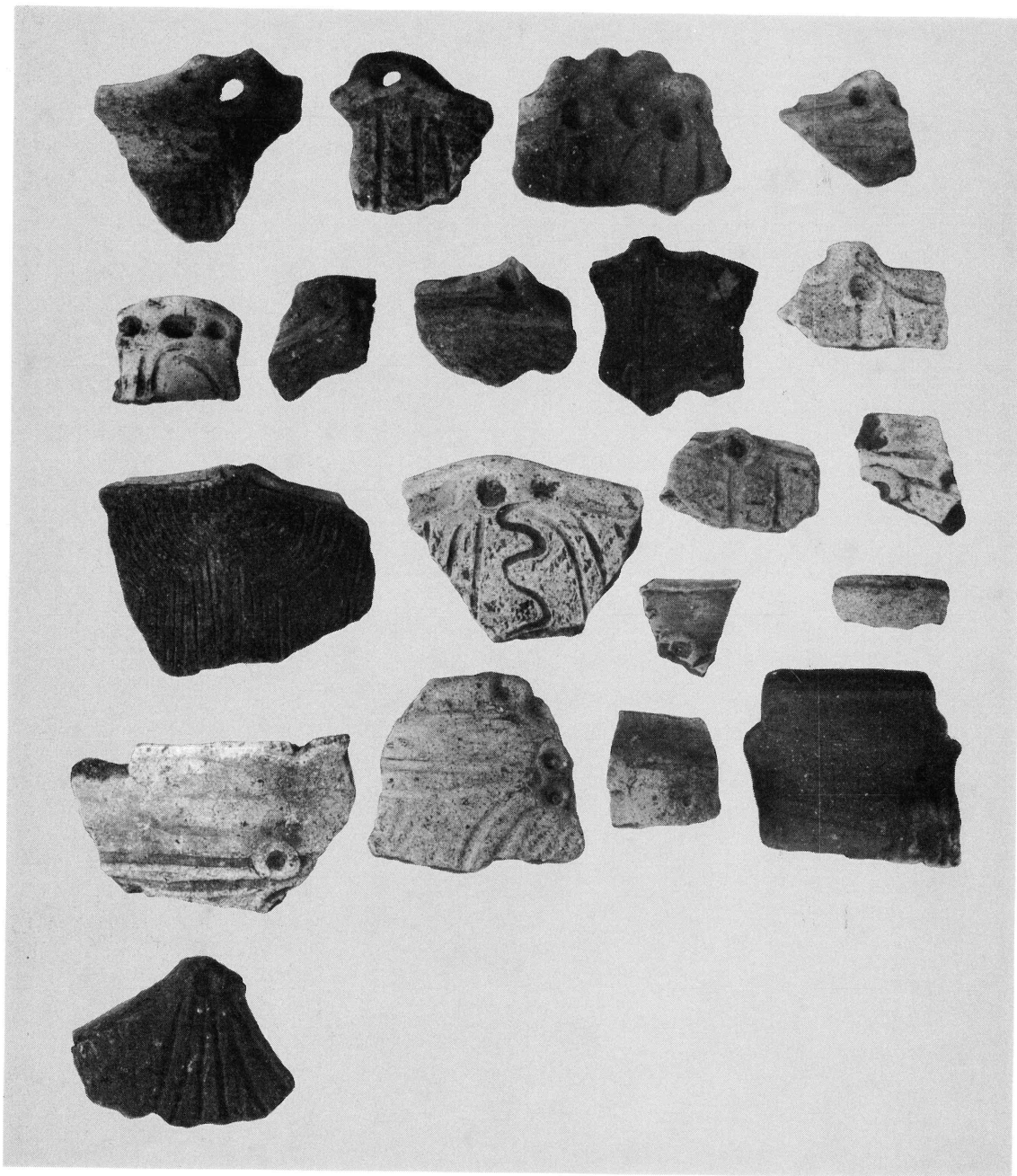


堀之内式土器の口縁部文様 (1)

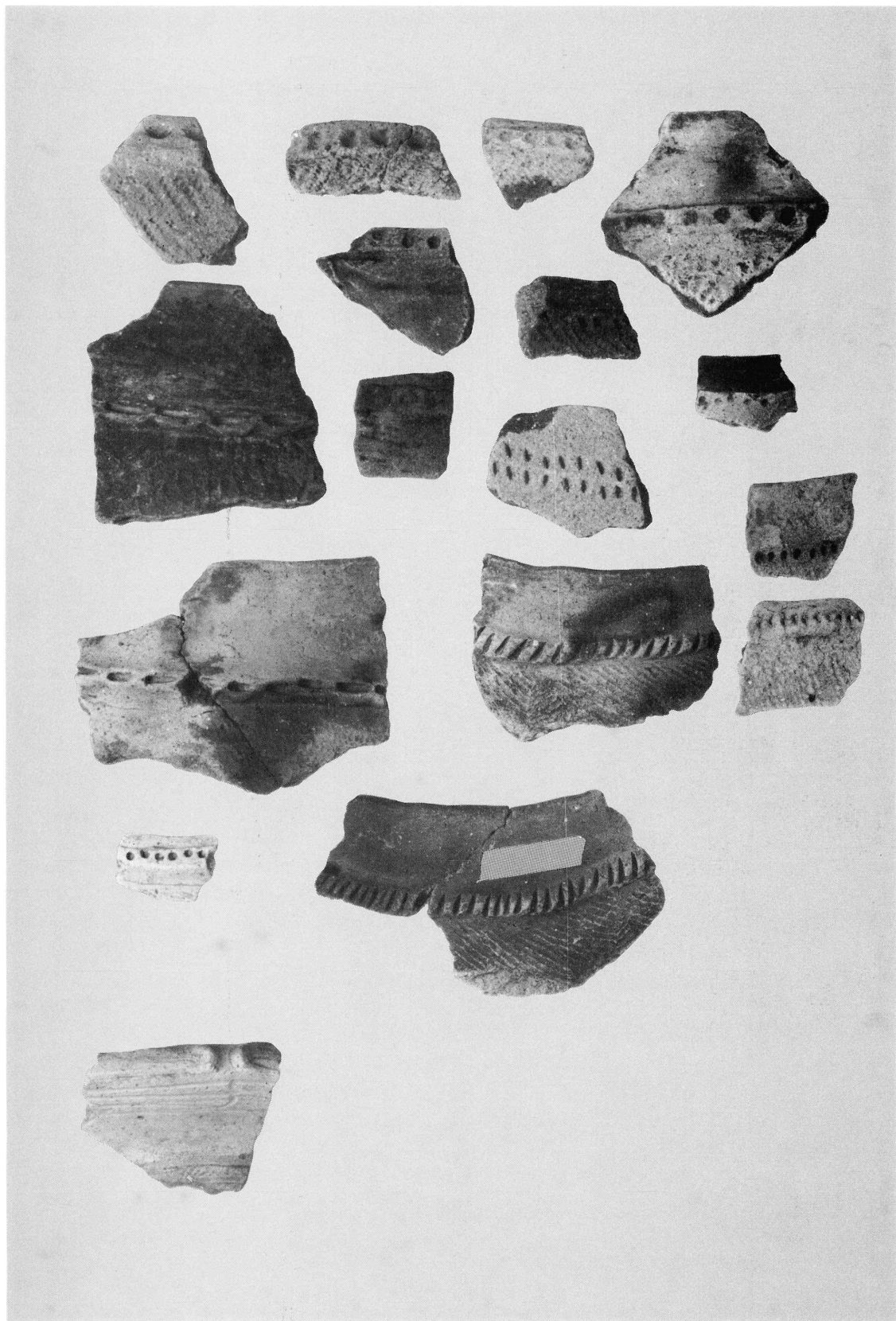


堀之内式土器の口縁部文様 (2)





堀之内式土器の口縁部文様 (3)

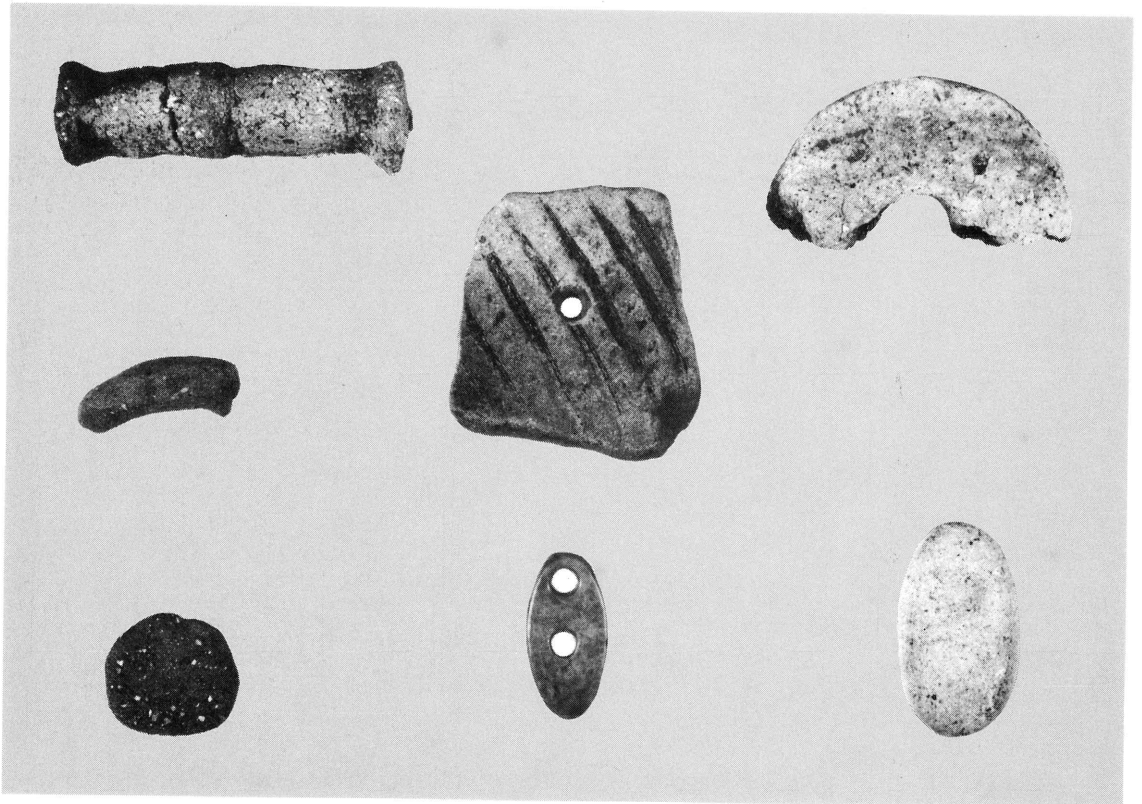


堀之内式土器の口縁部文様及び加曾利B式土器

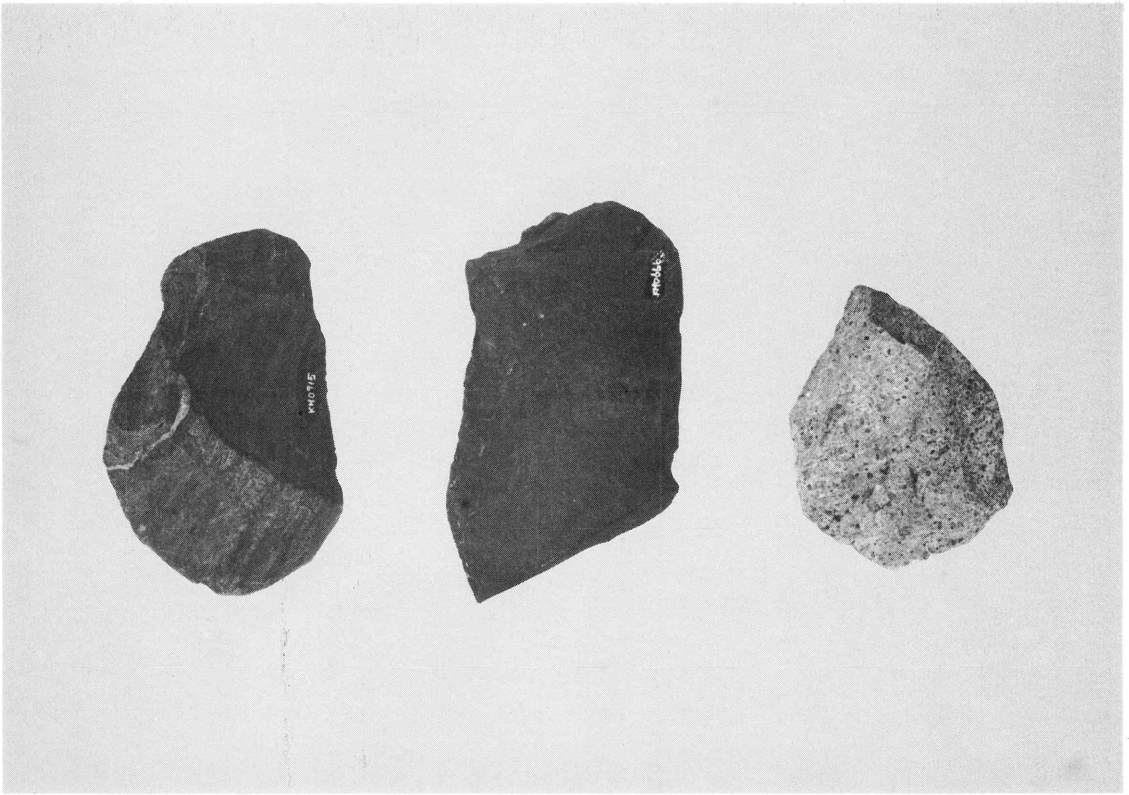




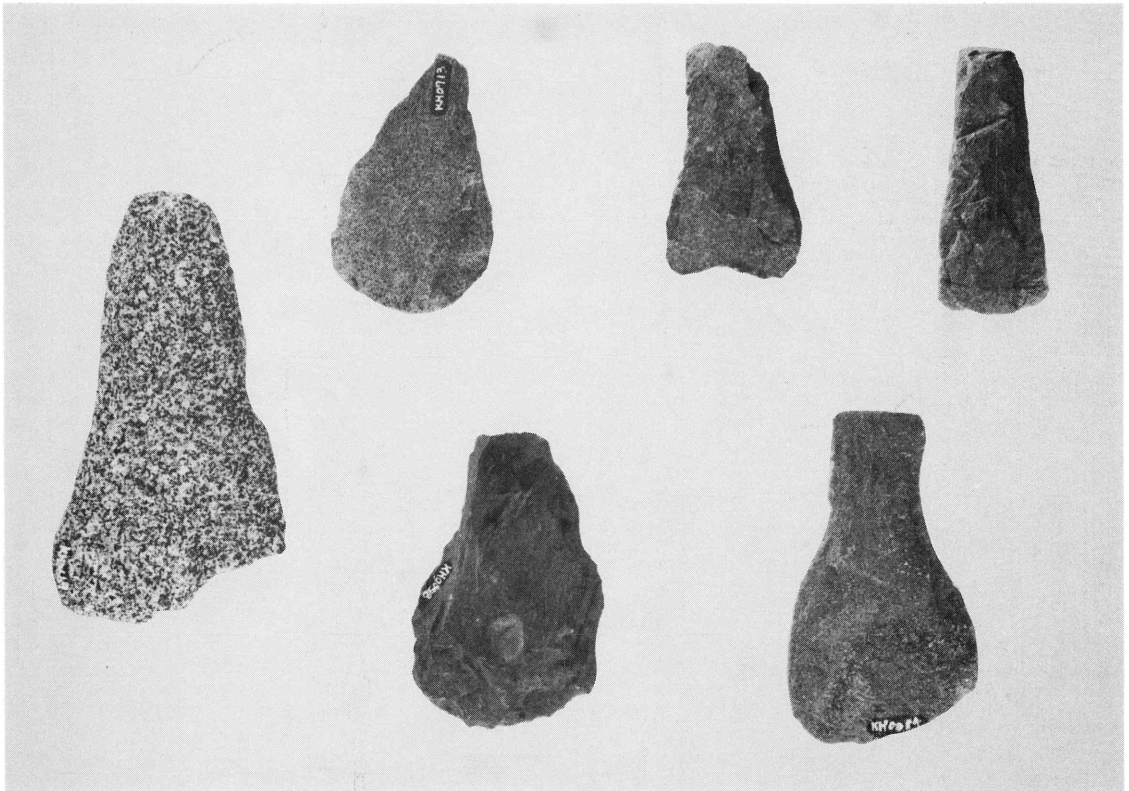
土器の底部圧痕（モデリング陽像）



装身具・その他

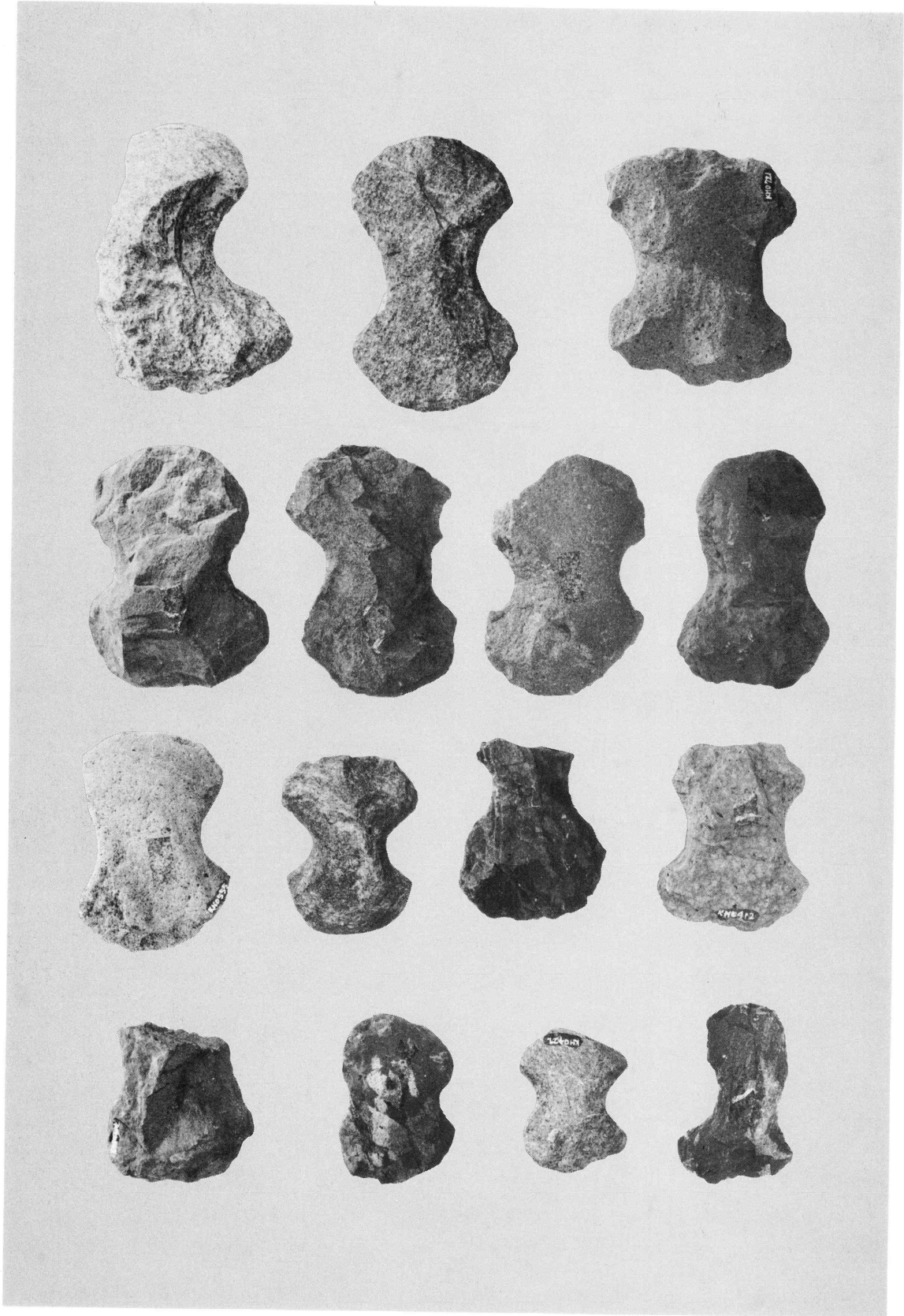


握り槌状石製品

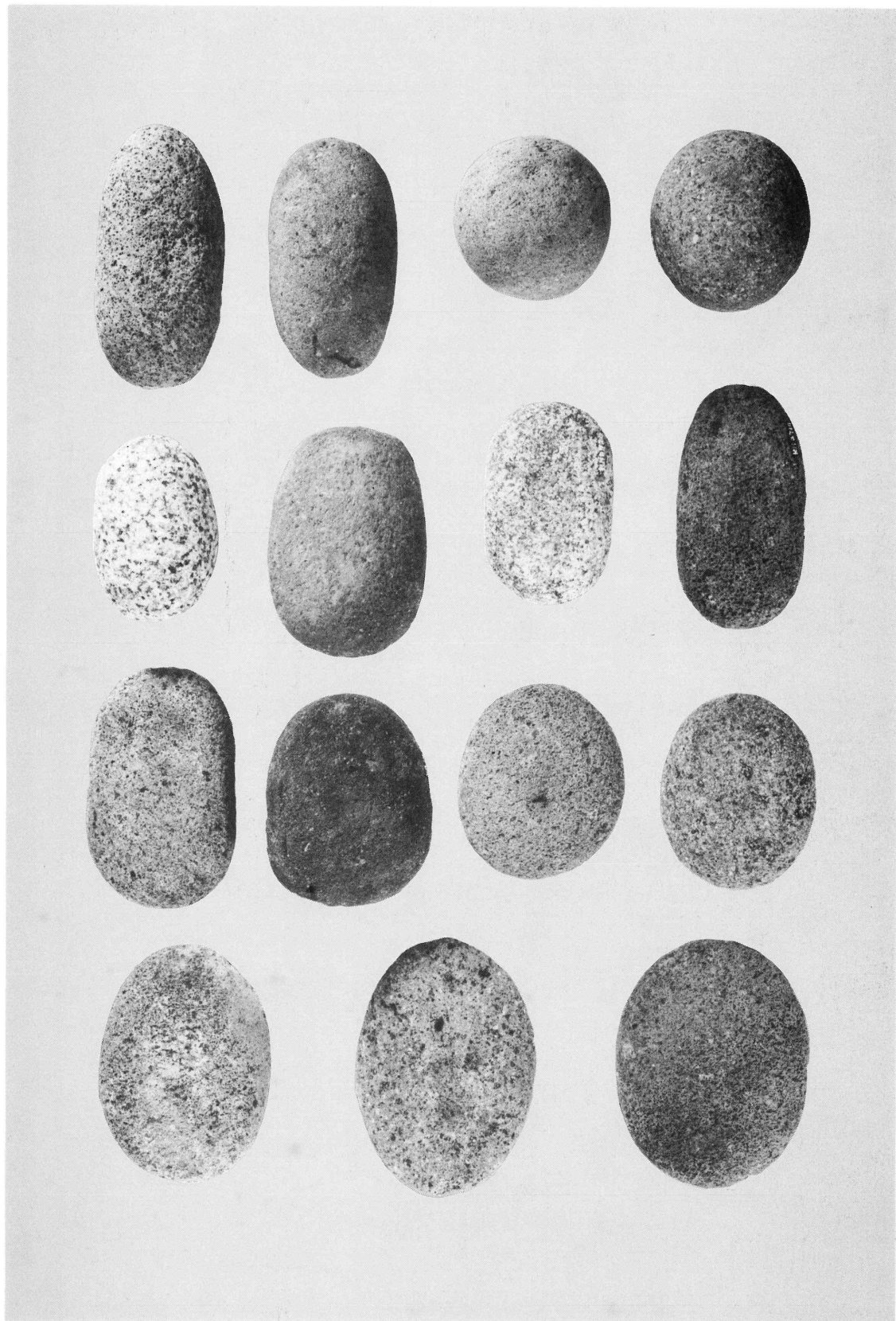


打製石斧（撥形と短冊形）



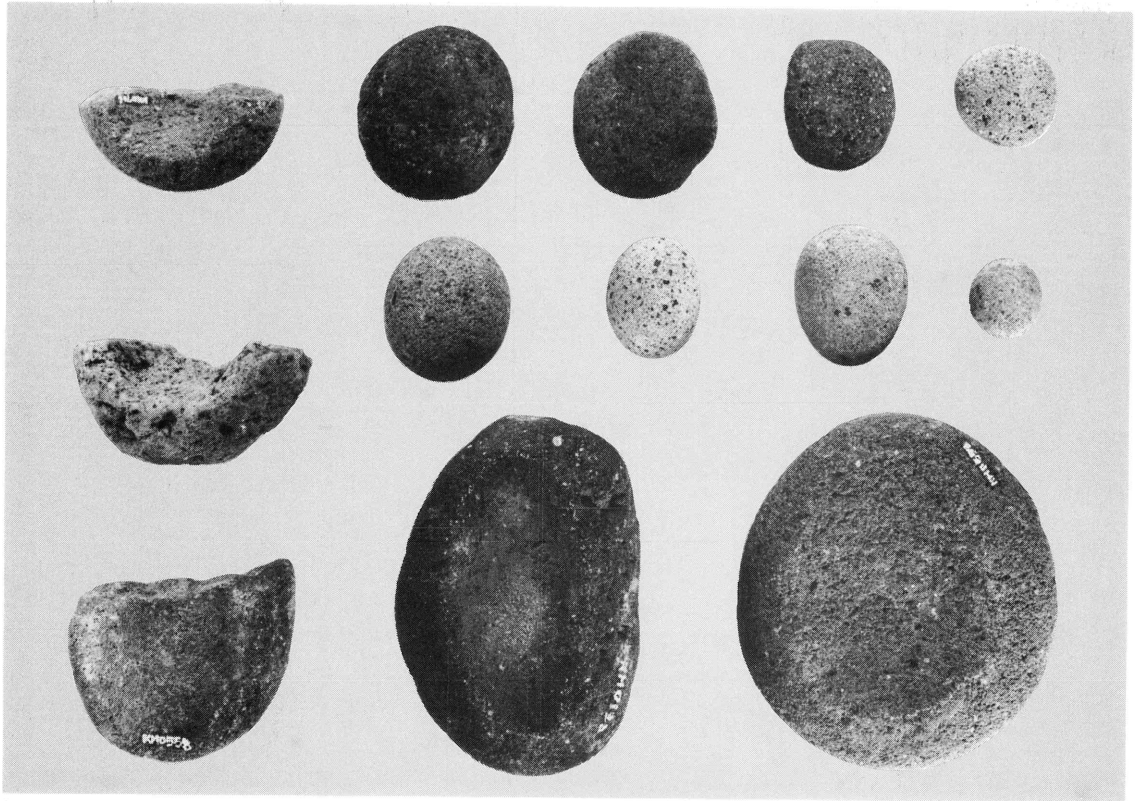


打製石斧（分銅形）

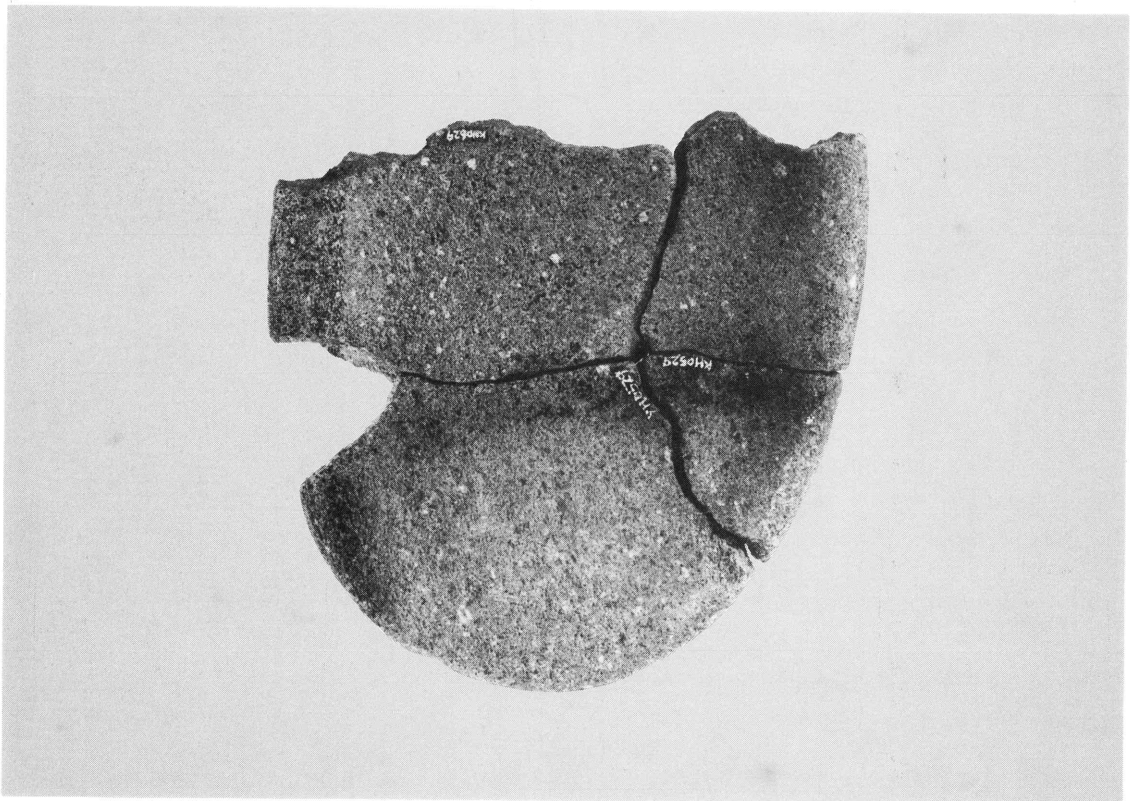


磨石・磨石兼敲石





小形の磨石と石皿

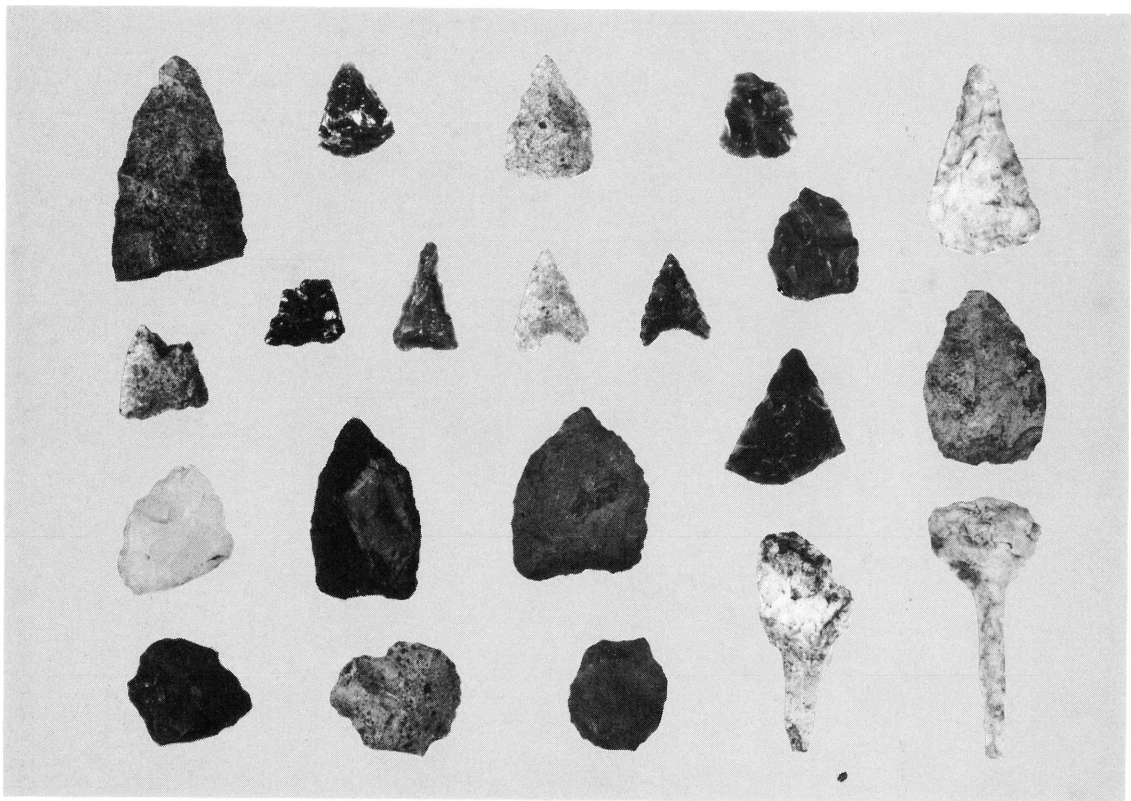


破壊された石皿の接合例

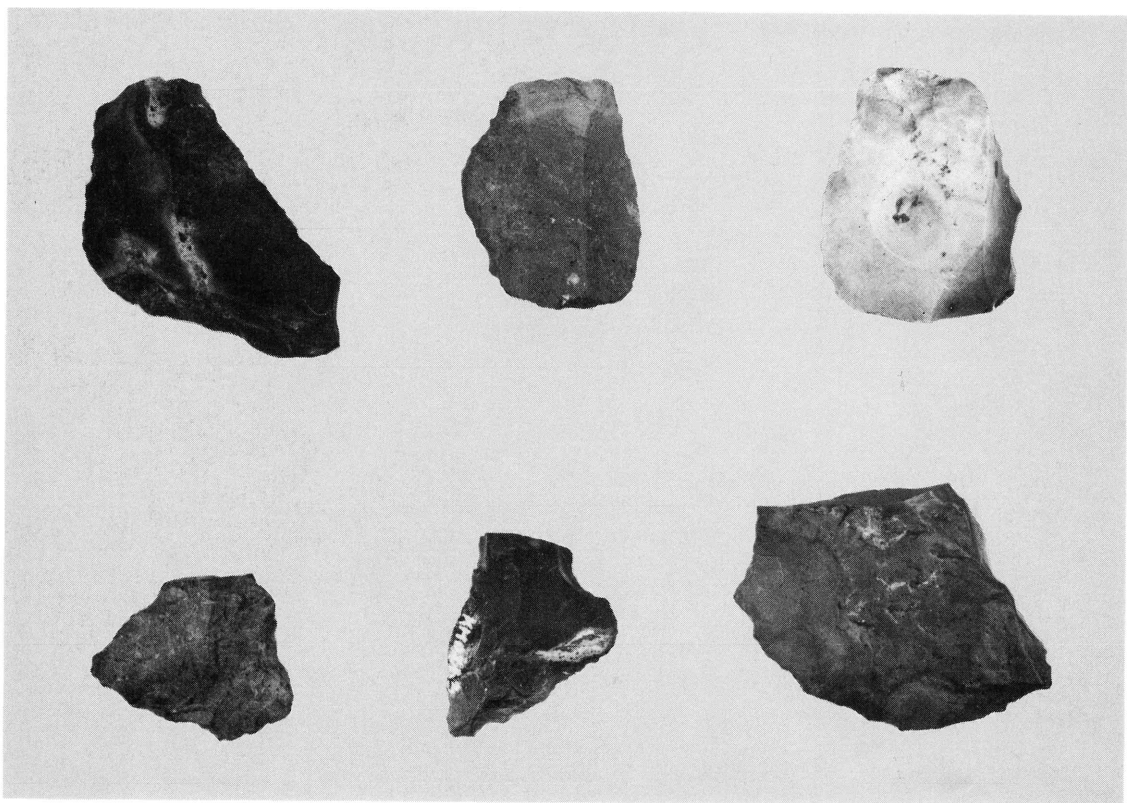


切目石 錘

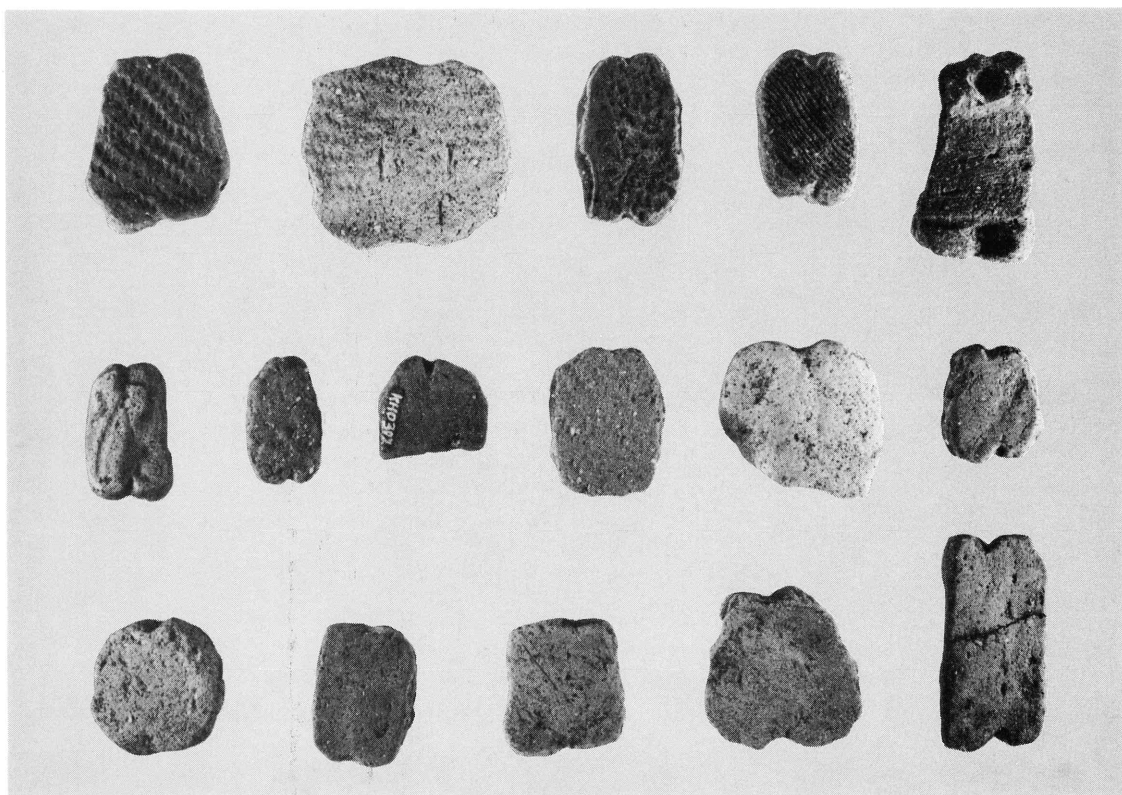




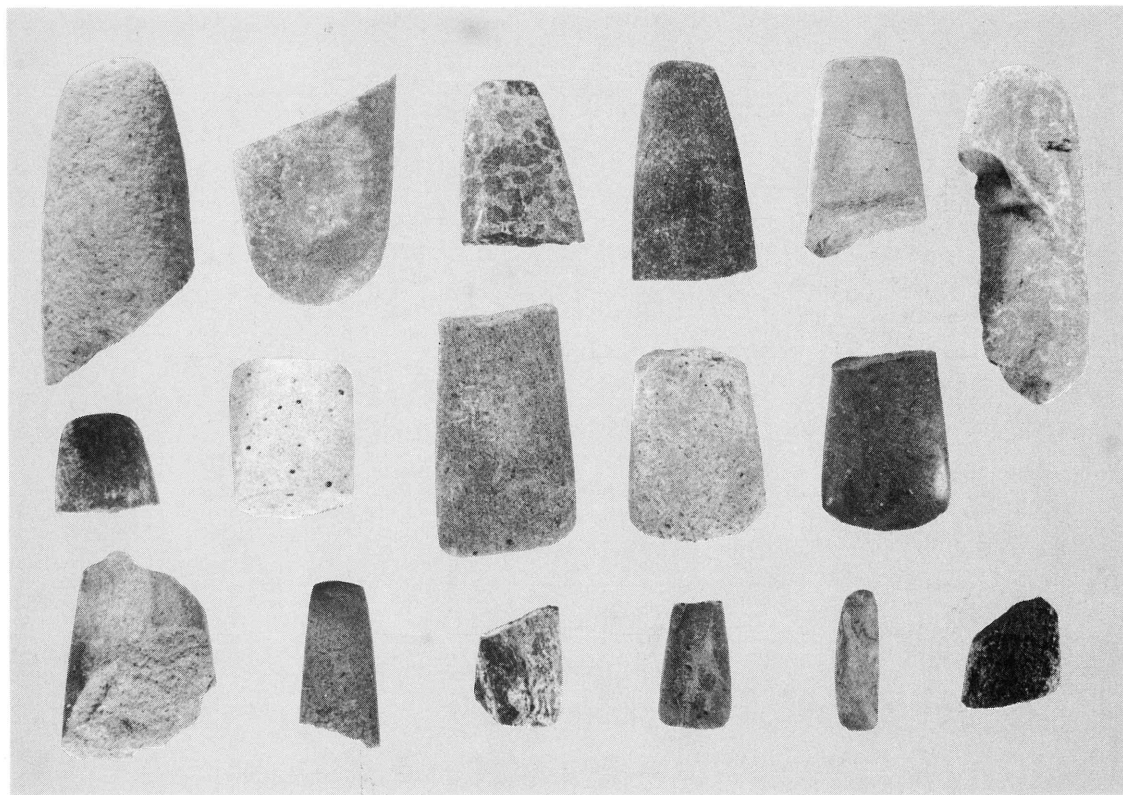
石 鋸 ・ 石 錐



削 器

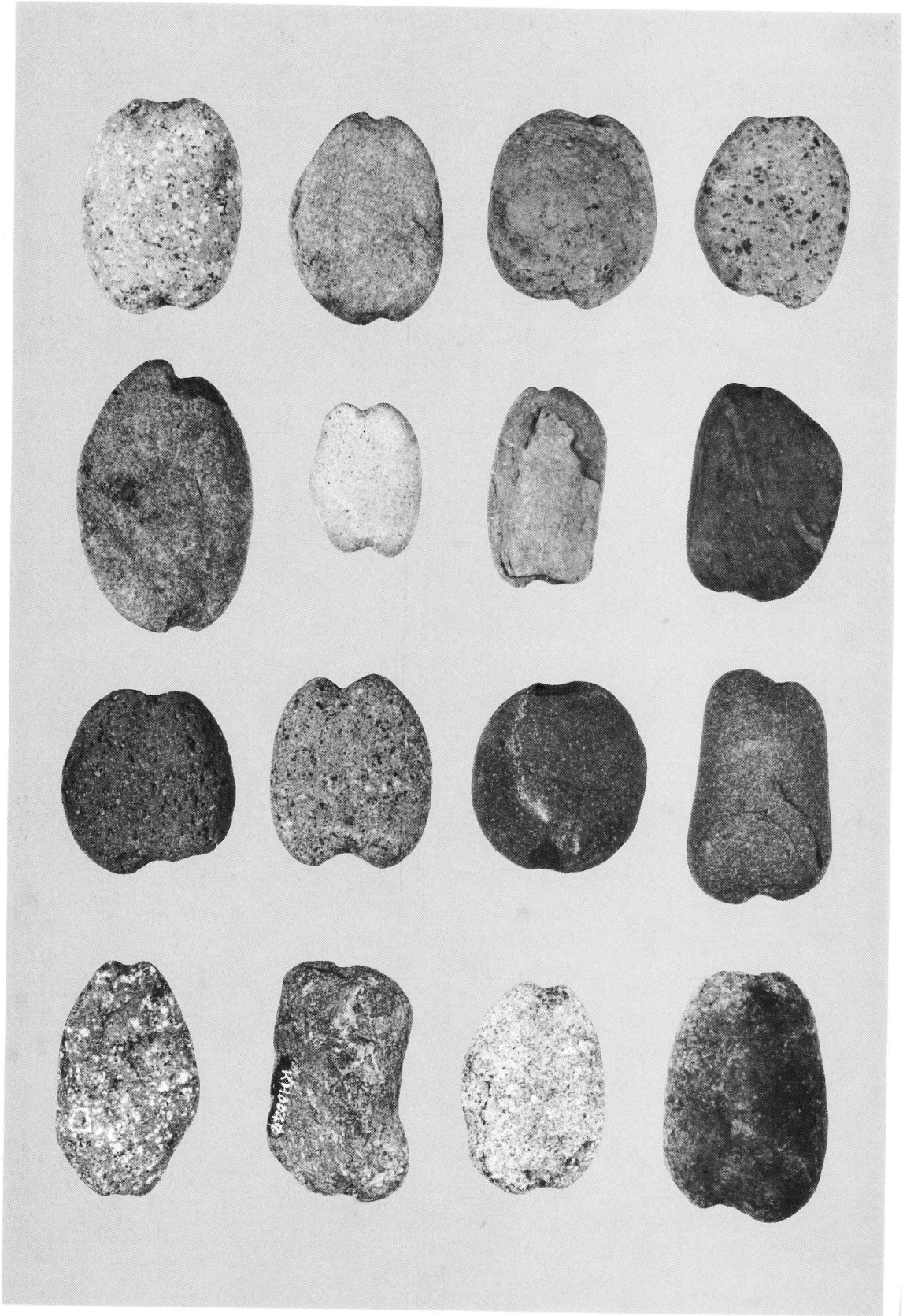


土器片 錘

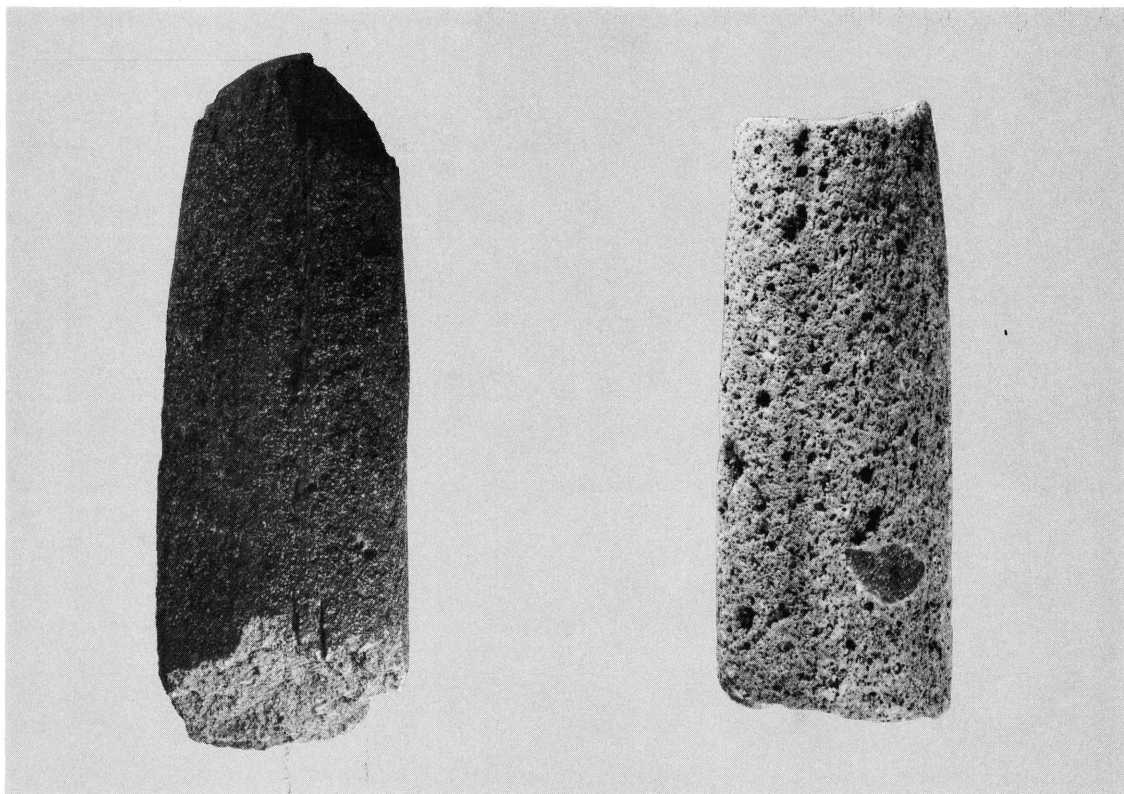


磨製石斧

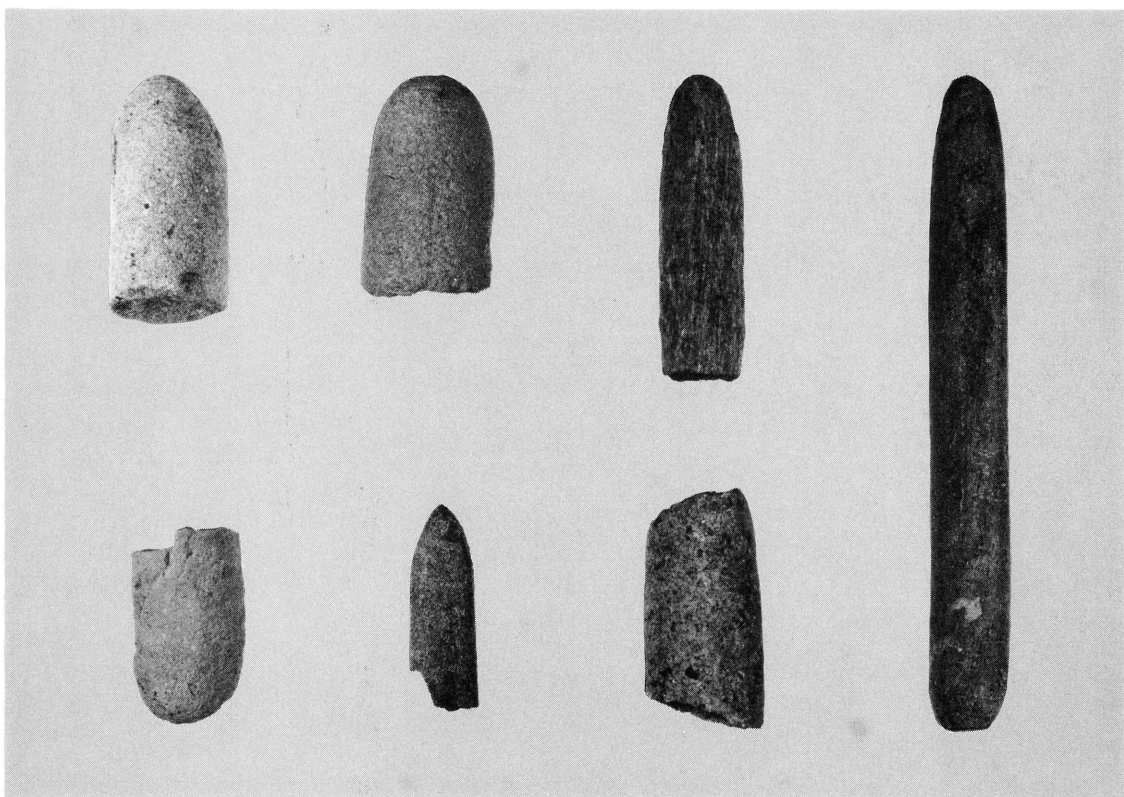




礮 石 錘



石 棒



棒 状 石 製 品



# 付 編

## 栃木県の集石遺構

—その研究史抄—

海老原 郁 雄

- I 栃木県内で発掘された集石遺構… 1
- II 特記される集石遺構…………… 11

# 栃木県の集石遺構

—— その研究史抄 ——

海老原 郁 雄

## I 栃木県内で発掘された集石遺構

昭和53年2月から4月にかけて実施された本書の上河内村古宿遺跡の発掘調査は、従前の配石遺構の調査に照して大きな成果を上げたといえる。集石群・土壌群・埋甕遺構の密集地区をひとまとまりのエリアとして把握できたことで、相互の位置関係や時期的な対比によりそのエリアの形成に至る由縁を解明する手がかりが得られたことと共に、今後に予定される周縁部の発掘調査（県道新設に伴う記録保存）と併せて、1つの集落空間におけるこのエリアの相対位置の確定が期待できるからである。集石の下面を掘って土壌が存在することを確めたことも、当然とはいえ前進であった。過去の調査事例が、正式の調査報告が行われていなかったり、行われても簡略に過ぎて遺構の性格を把握するに至らない、更には調査の不徹底さと相まって殆んど考古学的証明を伴わない時期確定や遺構の性格への言及など、いわば無定見ともいえるいささか貧しい扱われ方が、その時代の在り方を反映したとはいえ、この方面の研究を遅らせたことは否めない。その意味で、古宿遺跡の調査成果は必ずしも充分なものとはいえないが、今後の集落研究の進捗の上に、ひとつの資料とならんことを願いつつ、以下に、栃木県内発見の配石遺構についてその研究史を抄出してみよう。（文中、敬称略）

### 1. 塩谷町佐貫・環状列石（塩谷町船生字琴平脇、国史跡の磨崖「佐貫石仏」の東300mの丘陵上に所在）

地元の船生中学教諭石下二郎の発見により昭和27年6月13日～17日、7月5日～7日慶応大学で発掘調査した。山林に石列を追って、長径47m・短径37mの規模をもつことが確認された。遺構は大小の河原石をサークル状に並べたもので、配石間の出土遺物により縄文中期の所産と推定されているが、現在に至るまで遺構の実測図、調査の内容は公表されていない。調査の概況を記したものに次の文献がある。

- ・江坂輝彌「栃木県塩谷郡佐貫遺跡」日本考古学年報5（昭和27年度版）日本考古学協会
- ・辰巳光史「船生のストーンサークル（環状列石）に就いて」下野史学創刊号（昭和27.11）

『佐貫のストーンサークル』の発見は、貴重かつ稀少なニュースとして県内に喧伝され勇名を馳せた。遺構が神秘的でナゾに包まれた性格のものであっただけに、解明に対する期待は大きかったといえるだろう。以下に続くいくつかの配石遺構の発見も、＜佐貫に続け＞とする意図がうかがえる。遺構の考古学的な性格づけを抜きに、『佐貫のストーンサークル』はいつしか、石器時代の一大遺跡としてのイメージが定着していった。



2. 氏家町堂ツ原遺跡・“環状列石”（氏家町勝山、勝山城跡と重複する集落跡。鬼怒川右岸に川道と雁行する宝積寺丘陵の最北端に所在）

地元の郷土史家土屋喜四郎が、昭和28年当時、人夫が桑の根の掘起し中に、遺跡地の一部から径30cm内外の川原石が多数掘り出された旨を聞き、＜佐貫の環状列石類似の遺構が存在するように＞思い、慶大に発掘調査を依頼したという。

発掘は昭和28年10月18日～21日に、東西に長さ60m・幅3mのトレンチを、その中央部から南へ20mのトレンチを設定して行われたが、結局、“環状列石”は発見されなかった。ただ、トレンチ西端部付近に「石囲中に有頭の石棒の直立して埋没していた特殊な遺構」（下記文献）が発見されたという。

江坂輝彌「栃木県塩谷郡堂原遺跡」 日本考古学年報6（昭和28年度版） 日本考古学協会

この調査も報告書が未刊なので、遺跡のどの部分を発掘したのか不詳であるが、後年、当遺跡『勝山城三の丸』地内で集石遺構が発掘されたことを重ね合せると、＜佐貫の環状列石類似の遺構＞は実在した可能性もありそうである。

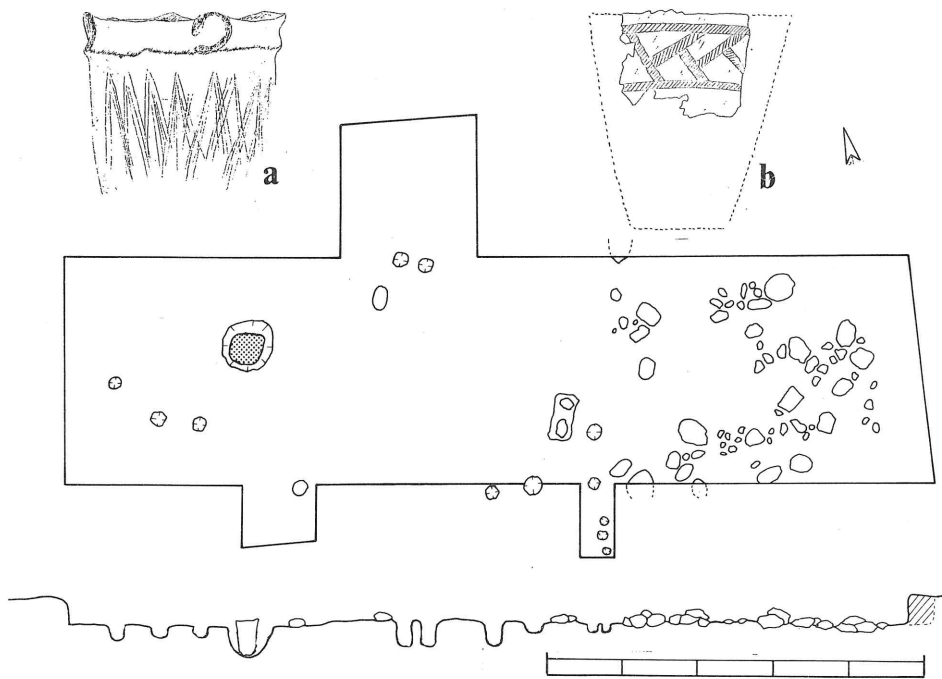
この調査と前後して、宇都宮大学が宇都宮市東方の清原村で、やはり中世城館飛山城跡と西隣した竹下遺跡の発掘を行っていた。専門的研究実績をもつ慶大とは異り、宇大は好学の学生が集い寄って結成した「郷土史研究班」が主体。その実績も前年の狩野村槻沢遺跡に次ぐ2度目の発掘で、助教授辰巳四郎を顧問とし、群馬県考古学界の碩学園田芳雄の指導を受けて実施したものであった。

3. 清原村竹下遺跡・組石遺構（宇都宮市竹下町、飛山城跡隣接地内に所在）

昭和28年10月8日～12日、宇大郷土史研究班が台地の一角に、長さ10m・幅1.5mのトレンチを設け、その「東端部からは河原石によって配置された組石が発見された」（下記文献以下）引用は同じ。全体図（第1図）によると、発掘区域の約3×4mの範囲に、大小の河原石がほぼ同じ平面にひとまとまりに散布している。長大な石は30～40cmで、それらが点状の間隙に中小の石が入っている。図の表示では、これらの集石は発掘区域外へも広がっているようであり、その点からはこの集石はもっと広がりをもつ集石の一部分であるように見える。「此の組石には縄紋式後期の堀之内式及び加曾利B式と思われる土器片が喰込んで発見されて居る」とあり、その土器は「三角形をモチーフとする磨消縄文」をもつ深鉢土器（b）とされ、堀之内Ⅱ式かと思われる。

宇都宮大学郷土史研究班「栃木県清原村竹下遺跡発掘調査報告」 文責塙静夫 昭和29.3

この集石に隣接する西側の発掘区域には、10数個の小穴が点在し、これを柱穴と断じ「平地式住居」としたことはあまり根拠がないが、この余白部に堀之内Ⅰ式の埋設土器が



第1図 竹下遺跡・組石遺構（「栃木県清原村竹下遺跡発掘報告」昭28.10.より転写）

存在していたことは集石との位置関係で注意される。この土器（a）は、口縁部の素文帯に四対のC字状突帯をつけ、体部に縦位の斜行櫛引文を施した大型の深鉢で、体下半部を欠損している。記述には「胴部以下を床面（黒色土）を掘り下げて埋めてあるのを発見し、土器内からは焼成良好の櫛目文の堀之内類似の土器片が蓋の如き様相を呈し発見された」とあり、ひとつの掘り方の穴に体下半部を欠損した深鉢形土器を正立で埋設していたことが明白である。土器aと集石遺構に伴った土器bとに先後の関係は見られるものの、この辺りの空間が堀之内式期にあって断続的に使用された事実は認められよう。

集石遺構の近傍に埋甕遺構が存在する在り方は、古宿遺跡における1号集石と1、2号埋甕の配置と近似している。これも堀之内I式期に伴うもので、1号埋甕は胴上半を逆位で、2号埋甕は胴上半を正位で埋設している。（図のドット部分はaの位置）

今となっては術もないが、集石の下面に追求が及ばなかったことを遺憾とする。この種の遺構が「精神生活に係る何等かの性格を帯びる」ことが予測されても、根拠がないからだ。この竹下埋甕例では、埋甕本体の内部に土器片が入りこんでいることが観察され、同様に、古宿1号埋甕でも本体内部に長さ20cmの河原石が入りこんでいること、2号では炭化物が多量に混入していることが観察されている。円筒形状の底ぬけの容器を埋設し、その空間内に後の時点で上方から異物の入りこむ在り方は特徴的である。集石が墓壙上部を



覆う構造体と仮定すると、後期初頭におけるこのような埋甕遺構の様相は葬送祭式に係る在り方……例えば幼児葬や袍衣埋納等の用途があったように想像するのである。

4. 那須町西ツ原遺跡・組石遺構(那須町大和須字原朴田, 大和須川と三蔵川の合流点でY字状に画された半島様の丘陵突端に所在。川床から比高約10mの沖積地)

渡辺龍瑞・辰巳四郎の指導により、昭和29年8月16日～22日、宇大郷土史研究班が発掘。東西に長さ10m・幅2mのトレンチを設け、その南側に三角形に拡張した約35㎡の発掘区域で、南東辺に沿って長さ約13m・幅1.8～3.2mほどの範囲に河原石が密集群を在して一面的に広がっていた。三角形の中央部には、隅丸方形の石囲炉をもつ円形プランの住居址があり、大洞C<sub>2</sub>式比定土器4個をはじめ石錘・磨製石斧・石鏃・炭化したクルミなどが発見され、床面附近から焼土塊や多量の木炭(倒木)が出土した。集石は、実測図で見るとこの一群で終結しているのか、更に広い範囲に及ぶのか分らないが、いくつかのユニットから構成されているように見受けられる。報告によると「組石のブロック(略)の配置間に据えた千網式C1類に似た土器が1コづつ2カ所から出…」(渡辺龍瑞・辰巳四郎, 下記文献)とあり、隣接する住居址と時期的に近いことが窺われる。

大和久震平・塙静夫『配石遺構』(「栃木県の考古学」) 吉川弘文館 昭47.6

渡辺龍瑞・辰巳四郎「栃木県那須郡西ツ原遺跡」日本考古学年報7(昭和29年度版) 日本考古学協会

集石は、帯状の一端では小さい礫が密集し、一端では比較的大きい礫がまとまりをもっている。「径20～40cmほどの河原石・礫を配したもの」(塙)とされ、集石は大小様々の石が重り合うように存在していたらしい。

この集石もその下面を発掘しておらず、近接する住居址との時期差も問題になる。全体的な印象からは、晩期の集石土壌墓群のように思われるが、記録から途れるのはここまでである。

5. 高根沢町向原遺跡・配石遺構(高根沢町石末字向原2429～54番地 鬼怒川の低位段丘に当たる沖積平野に立地)

昭和34年暮、高根沢町石末地内から環状列石が発見された、とする読売新聞の報道があり、翌35年1月に塙静夫が現地を踏査した結果、「環状列石ではないが一種の配石遺構であることを知った」ので、1月23日～25日に緊急発掘を行った。湿田改良の工事に伴う発見で、工事に急がれての厳冬の水田地内の発掘。調査対応を要請した県教委は予算不足を理由に取り合わず、塙が辰巳・渡辺両所の協力を得て教え子の作新学院生徒を動員しての私費自力の発掘調査であったという。

この遺構に関してか、「円形の敷石住居址で、直径5m、堀ノ内式住居址である」(下記文献)とする報告がある。調査期日は昭和34年12月26日、遺跡名は栃木県塩谷郡石末遺跡、所在地は栃木県塩谷郡阿久津村字石末字向原572番地、とある。阿久津村に町制が行われるのは昭和28年、それが高根沢町に合併されたのはこの記事の1年前の昭和33年のこと。住所表示の誤記はともかく、番地が全く異っており本人が現地を見たのかどうか疑わしい。

川島守一「栃木県塩谷郡石末遺跡」 日本考古学年報12(昭和34年度版) 日本考古学協会

その後、昭和39年12月19日～20日に層位確認の発掘を経て下記の報告書が刊行された。

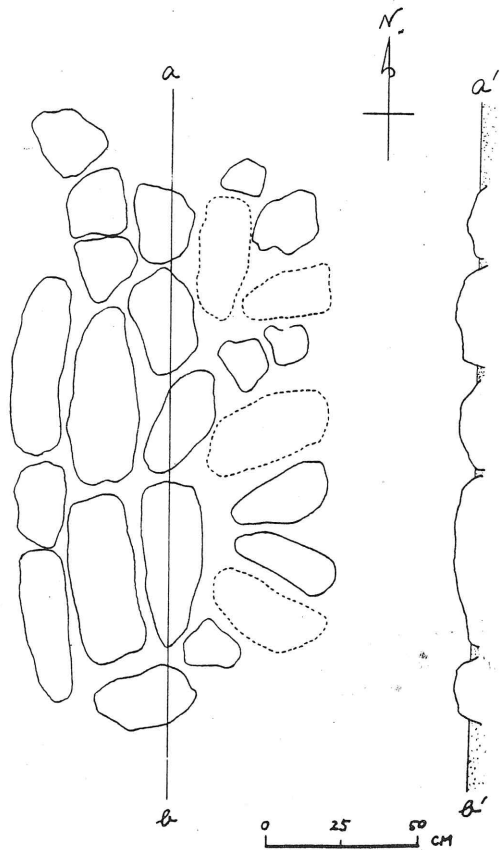
塙静夫・田代寛「向原遺跡」栃木県の縄文遺跡(其の三) 作新学院考古学資料室 昭和42年4月

発掘は長さ25m・幅2mのトレンチ(T<sub>1</sub>)と、同じ幅でT<sub>2</sub>(25m)、T<sub>3</sub>(8m)を設けて行い、T<sub>1</sub>4区から配石遺構(2区)が見つかった。

「この遺構は南北2.1m、東西1.3mの範囲内に20箇の河原石を敷石したものであり、石材は鬼怒川から運搬されたものと思われる長径75～30cm内外の、扁平な河原石の平坦面を上にして敷き、その間隙には殆んど小石を埋めてはいない。遺構の長軸はほぼ南北に走り」数箇の河原石はすでに取り去られた形跡があるが、比較的整然と配石され、上面は平らである。配石面は第4層(黒褐色腐植土)中に位置し、堀之内式の古い型式土器がこれに伴っている」(塙 上記文献)。

黒土中の平面に並べられてはいるが、組みこんではいない。長大な河原石を3列縦位に並べその一辺を中小の石で囲むように配置している。集石自体には間隙が見られるが、列状のまとまりをもつ一群と思われる。この配置状況から想定される縄文時代遺構として、柄鏡型敷石住

居が上げられる。中央の石囲炉を敷石でとりまいた六角形のプランと、炉から入口部分の敷石部までを直線的に結ぶ通路状の敷石。プランにとりつく縦長の配石を柄鏡になぞらえての命名で、中期終末段階以降に関東一円で出現する。後述するように、この類の柄鏡状集石

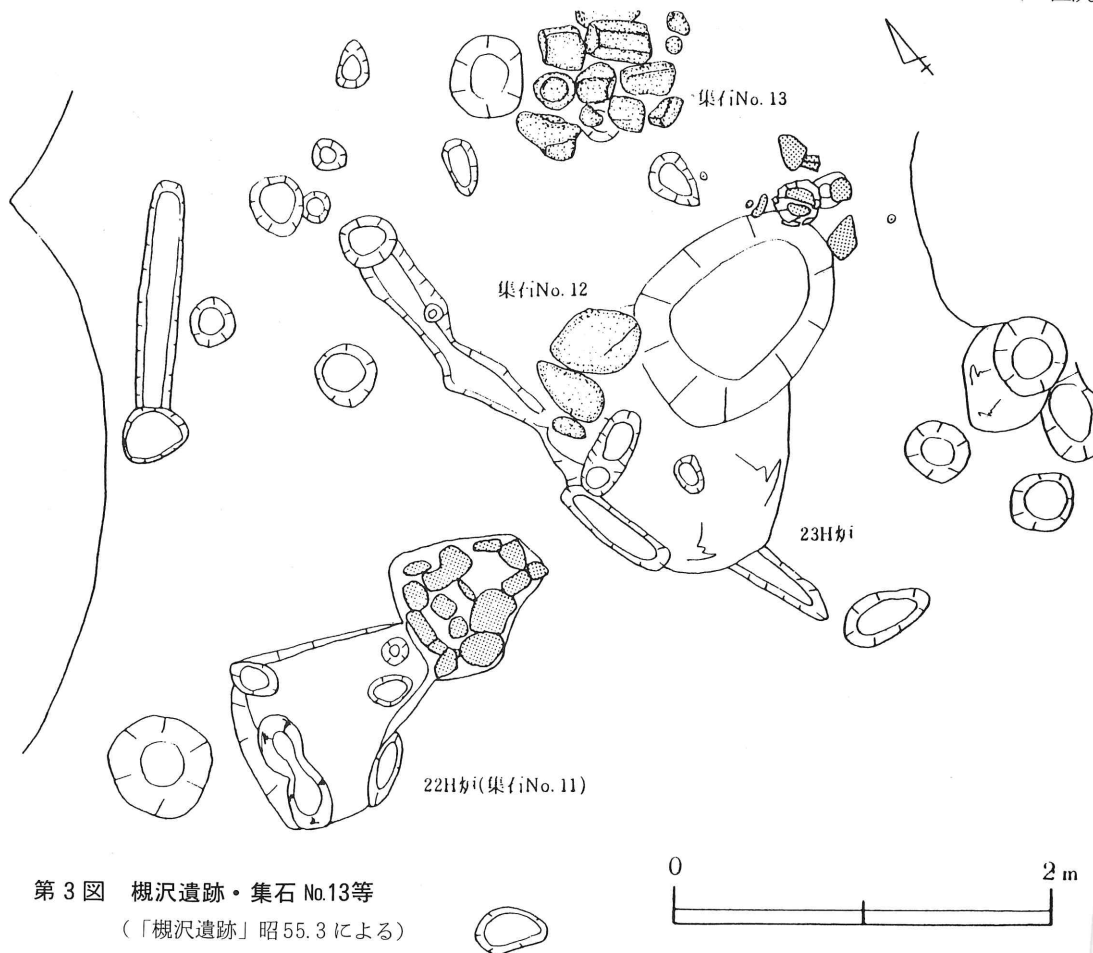


第2図 向原遺跡・配石遺構

遺構は氏家町勝山遺跡で発掘されているが、それとの類似例に相模原市九坊院遺跡の配石遺構（後期初頭）がある。勝山例の直線状部分は縦長の石を長軸に沿って配置，九坊院例に幅広の石を長軸に直交する配置をとる。向原例は配石遺構の一部分をなすものと思われるが，直線的に配置する集石の在り方は，勝山例と似た柄鏡状遺構の“柄”部分ではないかと考える。即ち敷石住居の直線状の部分に相当する遺構ではなからうか。

【参考】 西那須野町槻沢遺跡・集石No.13（昭和52年7月～11月，県教委が広域農道建設に伴い発掘調査。下記文献）

向原遺跡の配石遺構に比べられる類例の遺構として，槻沢遺跡の〈集石No.13〉が上げられる。この集石遺構は，埋甕を伴う複式炉（中期後葉）をもつ23号住居址と重複しており，集石本体は住居址を埋積した黒色土中に存在しているので，それより新しく称名寺式期以降後期初頭ごろに位置づけされるものと判断された。この辺りは住居址の重複が甚しく，23号住居址複式炉のすぐ西寄りにも22号住居址複式炉があり，両者とも大木9式期の所産。〈集石No.13〉は，これら住居址が廃絶され黒色土で埋められた地面につくられたものである（3図）。



第3図 槻沢遺跡・集石No.13等  
（「槻沢遺跡」昭55.3による）



〈集石No.13〉は、偏平縦長の河原石を長軸に沿って並べたもので、北西を向いている。集石は、大小12個の河原石を同じ平面に配したもので、石の上面は同じ高さをなさない。石の間隙にも小礫の充填はなく、これら敷石の下面には土壌等はなかった（写真①）。

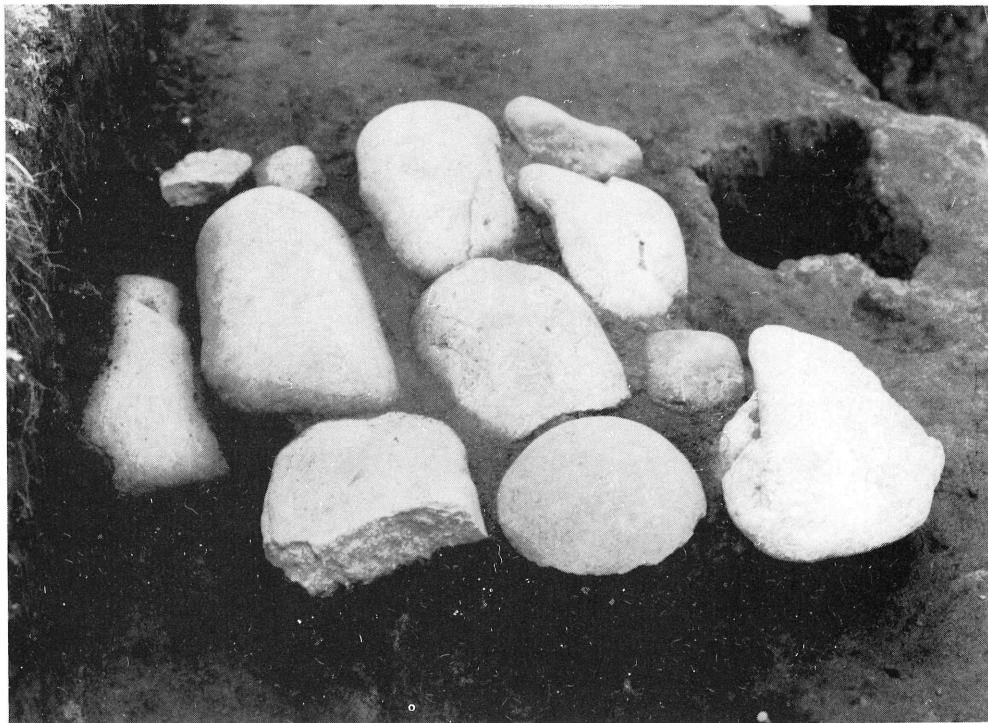


写真1 槻沢遺跡・集石No.13（西那須野町）

集石は現地表から浅い部位に存在したため、石自体が動かされており、かなりの石が抜き取られ部分的に存在したものであろう。

この集石も柄鏡型住居の柄部分であろうと考える。伝聞するところでは、槻沢遺跡で敷石遺構が農耕時に見つかったことがあるといい、この種の遺構が複数存在した可能性がある。中期末葉から後期初頭に至る間、住居の建て替えが連続的に行われた結果が、この集石遺構一帯の重複状況を招いたもので、こうした在り方は集落空間における居住域の規制によってもたらされたといえる。その意味でも、〈集石No.13〉は住居址の一部と考えるのが至当であり、空間規制の意図からはずれる“祭祀的遺構”とは思えない。

同様に、向原例配石遺構も「結局、縄文後期初頭の集落跡の一部に構築された祭祀的要素をもった遺構ということがわかった」(堀 前掲「栃木県の考古学」。下線は筆者注) とする見解には疑義がある。

海老原郁雄他「槻沢遺跡」 栃木県教育委員会 昭55.3

## 6. 大田原市真子遺跡・配石遺構 (大田原市平林, 蛇尾川右岸の段丘縁辺に立地)

大田原市平林・真子遺跡は、昭和39年9月29日～10月5日に大田原市教委の委託により宇大史学教室(辰巳四郎指導)が発掘調査し、敷石住居址が隣接して2軒、その近くから<西区3号配石遺構>が確認された。「栃木県の考古学」の『配石遺構』中の塙の記述には、この3号配石遺構を“带状配石遺構”と呼び「多分祭祀関係のものであろう」と判断しているが、遺構の状況からは敷石住居址と考えられるものである。「」は記述の引用。

「幅1沓内外、長さ4沓ほど(略)。長径40～50、短径20～30沓位の細長い河原石を二、三列に並べたものである。(略)東北隅の遺構は長辺90、短辺80沓位の規模で、10数個の河原石で構成された炉様を呈し石棒が出土している。(略)報告には一種の環状列石と記している。この環状列石と带状配石は一對とみなされる」(下線は筆者注)

下線部分の記述は、“環状列石”=柄鏡型住居の炉、“带状配石”=炉と入口部分を結ぶ直線状の敷石つまり<柄>の部分、と理解されるのである。

この場合、真子遺跡では敷石住居3軒が接近して存在していた、ということであり、所産時期は確定できないが、中期末葉から後期初頭に位置するものと報告(下記文献)されている。槻沢例<集石No.13>や真子例3基の在り方をみると、敷石住居は特殊な祭祀遺構などでなく一般住居と理解すべきものであり、突発的に出現するその意義や住居自体の機能は別に考察すべきものと思われる。

辰巳四郎・田代寛「栃木県大田原市平林真子遺跡発掘調査略報」昭40.4

## 7. 氏家町勝山遺跡・“柄鏡状遺構” (氏家町勝山, 勝山城跡三の丸地区。立地状況は前述)

改田に伴う氏家町教委主体の発掘調査(担当者は塙静夫・田代寛)で、昭和44年4月19日～5月11日に実施。三の丸跡北西部分の鬼怒川断崖にほど近い地点と、三の丸南限の土塁の南側地点の二カ所で集石遺構が見つかった。前者を1号、後者を2号と仮称する。

概要は塙静夫が公表(下記文献)しているが、正規報告は発刊されておらず、「発掘報告書の命綱ともいうべき実測図が所在不明」(「氏家町史資料集I」)なので状況を正確に把握できない。この要旨から抄出する。

塙静夫「栃木県氏家町勝山遺跡の調査」日本考古学協会昭和44年度大会・研究発表要旨 日本考古学協会昭44.10.

### 1号集石群について

「この環状列石は長径約18沓、短径約16沓、配石幅約2～3沓を呈する外帯と、径4沓ほどに配石した内帯とからなり、鬼怒川崖に向かって列石の西側には長さ約11沓、幅2～3沓の範囲内に比較的大きな径30～40沓くらいの河原石を利用した带状の突出部が付属する。しかもこの带状配石の突端部には、一辺約70沓の方形に近い石囲い炉を呈する遺構が

が存在する」(下線部は筆者注)。

“環状列石”と“帯状の突出部”とは見かけ上連続しているように感じられるが、“環状列石”の方は「いくつかの配石群から構成され、それらの配石群は円形、楕円形、方形などさまざまな様相を呈している」もので、それだけでひとつのまとまりをもつと解される。即ち“帯状の突出部”は柄鏡状遺構(写真②)として分離して検討してみる。その形状は、

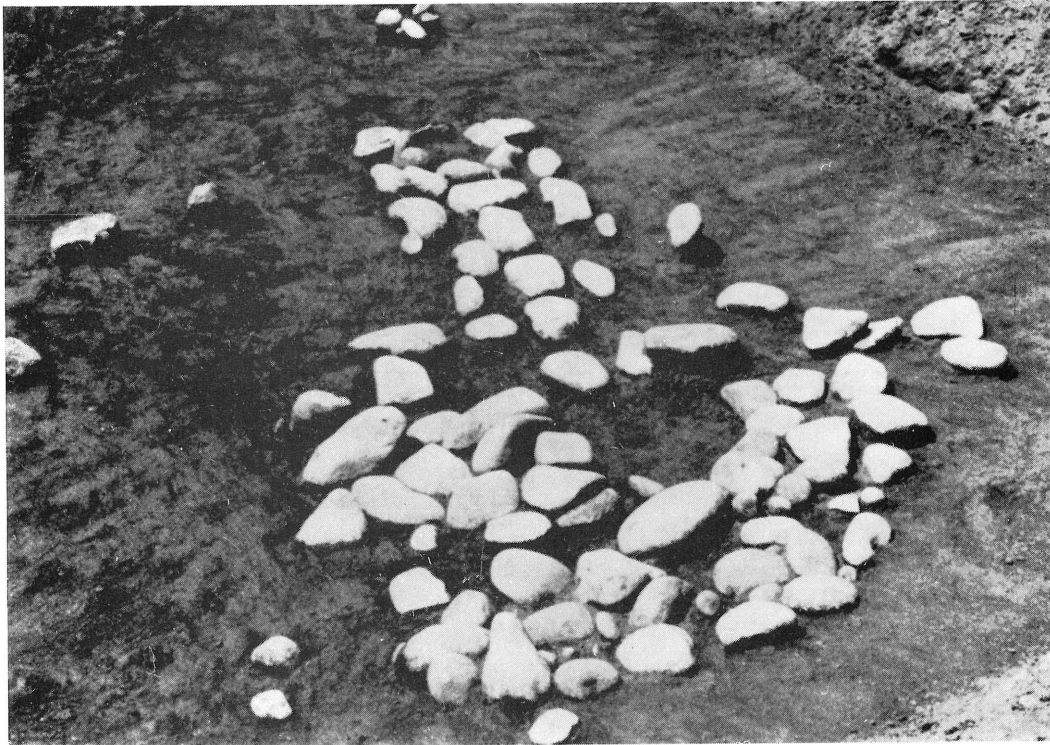


写真2 勝山遺跡・柄鏡型遺構(氏家町)

手前が敷石部、直線状の“柄”部で結ばれ奥が石囲炉

帯状敷石の西端部に円形の石囲い炉様の組石、東端部には円形の空白部を中心とする円形の敷石があり、両者も直線的な帯状の敷石で連結する。帯状敷石の方位は真西から22度ほど北へ振れていた、という。その中央部を試掘切断したところ土壌は存在しなかった。改田時の工事で石は動かされ、かなり抜き取られた形跡もあるが、柄鏡状の概形を窺うことができる。柄鏡型住居である。

写真②で、手前が入り口部分の円形敷石、縦長の石が直線的に並び“帯状”の配列をなして、住居中心部の石囲い炉を結ぶ。炉を取り巻く敷石が見られないが、抜き取られたのか、当初から設置されなかったのか、であろう。敷石住居は、“柄”のつけ根に埋甕をもつ、中期終末に突発的に関東域に広がる家屋であり、その形態は埋甕祭りに由来するものと考え



えられる。栃木県域では、真子遺跡発見例を除き実態不明の状態にあったが、以上のように、個々の発掘事例を收拾するとそれらが実在していたことがおぼろげながら窺えるのである。ただ、それらの所産時期が中期終末ではなく、後期中葉に及ぶ可能性があること、柄鏡型の“柄”が縦列の長石で構成されること、肝心の埋甕が確認されていないこと、などいくつかの疑念があることが上げられる。柄鏡型住居は、果して後期初頭に至っても存続するのだろうか。相模原市九坊院遺跡の配石遺構はひとつのヒントを提示している。

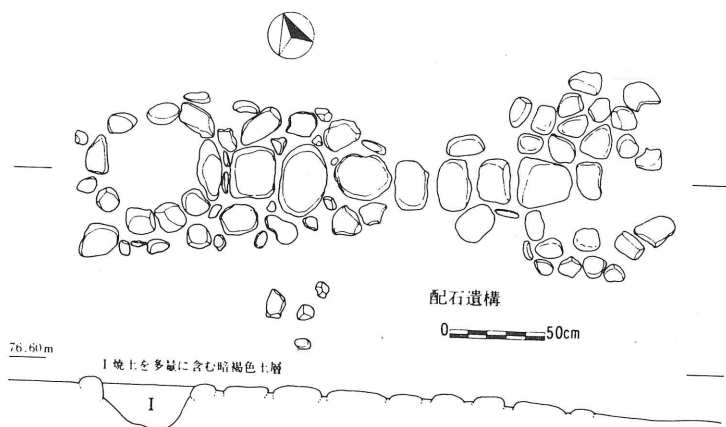
※ 昭60.7～8, 勝山城跡発掘調査(担当者屋代方子)において、石囲炉を伴う配石遺構3基が発見された。当該柄鏡型遺構との関連で、その詳報が待たれる。

## 8. 参考資料 相模原市九坊院遺跡・配石遺構

昭和57年8月15日～30日に発掘調査

九坊院遺跡(相模原市当麻字九坊院)は造成工事に伴い昭和57年8月15日～30日に発掘調査(日野一郎調査団長)された。以下「」は下記文献から引用。

配石遺構は、全長3m20cmで、「3つの単位体から形成」され、主軸の方向はN-72°W(第4区「西側の先端に15×15cm程度の石を9個円に配置し、内部は火焚場」,「主軸を形成する一列に配置された川原石(略)は、20×30cm程度の石を7個配置しており、西側の3個は大形の石である」,「東側端部に15×15cm程度の石を逆U字状に配置



第4図 九坊院遺跡・配石遺構(「九坊院遺跡」昭58.4による)

(略), 精査の結果ほぼ円形状に(略)川原石は密に敷石されていたものと考えられる」

とする構造の配石遺構である。所属時期は後期初頭と推定されるといい、埋甕は伴っていないかったらしい。炉と入り口(または張り出し)部を直線状の敷石で連結した柄鏡型住居であろう。“柄”部の敷石が長軸に対して横位であること、全長がかなり短いこと、を除けば勝山例“柄鏡状遺構”にきわめてよく似ている。栃木と神奈川という懸け離れた地域の遺構であり、類似性だけで両者を同一視することは慎まなければならないが、柄鏡型住居の関東的な普遍化、状況によりプラン内の敷石を省く構築、後期中葉まで時空を延長した存続などを考慮した場合、柄鏡型住居の消長を示すひとつの在り方を示したものと理解することはできないであろうか。

## II 特記される集石遺構

集石遺構が、それが所在する集落跡において集落の構成や機能と如何に係っているのか。従前までの発掘調査にあつては解明にまでは至らなかった。真子遺跡や勝山遺跡において配石の下面を発掘した事例（田代寛ら）を除けば、“切り込み”不足の調査技術の故もあるが、配石遺構の意義を考古学的見地から深く検討することもなく、考え及ばずとなるときわめて安易に“祭祀的遺構”として片づけてきた経緯もあった。発掘技術が進歩し、従前とは比較にならぬほどの調査データが集積されてきている今日、先人の残した成果を活用し検討を加え、今後の研究進捗に意義あらしめるべきであろう。

以下に特記する3つの遺構は、いずれも詳細なデータを欠いているが、栃木県内の集石遺構を研究する上に大きな役割を果すものと思われるので、現時点で把握できたデータを添えて掲載するものである。

### 1. 塩谷町佐貫・環状列石

正規の発掘報告は未刊だが、概要を述べたものに前出の二つの文献（江坂、辰巳）があり、その抄出により概況を見る。

遺跡は、「磨崖仏の東方に隣接して、北方より延びている丘陵の南端部に当り、東方に面した松林の傾斜地の中段、傾斜が緩やかになった地点にあつて（略）誠によい眺望の土地」（辰巳）で、「台上南斜面の畑地には縄文文化中期の土器片、石器などを出土する聚落遺跡」（江坂）という。

遺構は、既に発見されていた南側列石の両端から発掘を始め、ボーリング棒で地下に埋没している列石を探りながら掘り進めた結果、「山の傾斜に沿った東北東より西南西の方向を長軸とした、長径47m、短径37mの大環状列石」（江坂）であることがわかったという。環状部の「東北部には外側に北へ、南西部には内側に東へ、それぞれ七、八米程列石が腕状をなして延びている」（辰巳）状況にあつた。配石の幅は「50cm～2m」（辰巳）で、大小さまざまな河原石が粗雑に並べられた感じだが、「大は長径1.5m以上の柱状のもの」（江坂）がそれらの中に混って存在していた。

最近、機会があつてこの「船生ストーンサークル実測図」のコピーを実見することができた。この図は公表されていないので、印象だけを記すと、辰巳氏が記述した東北部と南西部とに取りついた“腕状”の列石は確かに実在しており、前者は短くて直線状に存在しているが、後者はその延長が南東部内側近くまで延びており列石は南側で二本の構成をなしている。列石全体の概形は、北を頂点とする四辺形に近く、南を頂点とする両辺では配

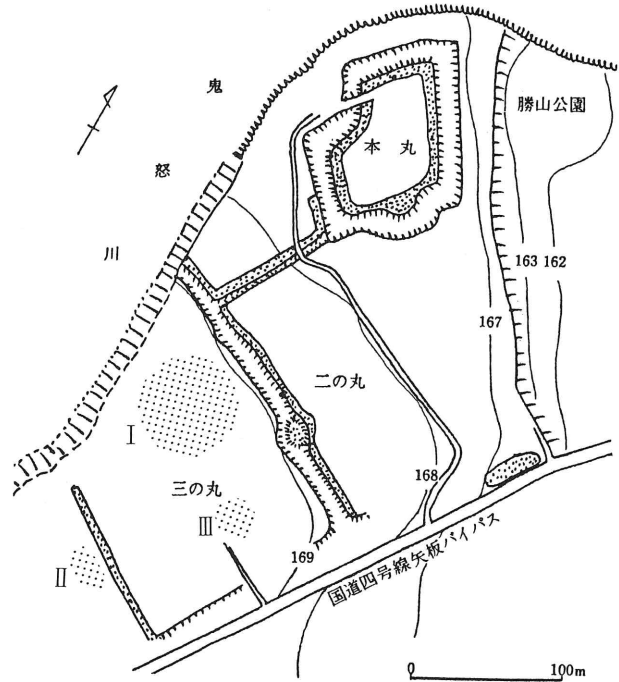
石がまばらになっている。東の角から内側に7,8m離れて長大な石の集石があり、「長さ1m20cm・最大幅85cm程の三角形の巨石」(辰巳)など2個がなかば埋れて横たわっていたが、「他に3個の同様な石質の大石がこの場所に数年前まで所在していたとのこと」(江坂)という。この集石は配石遺構全体の中心的な施設と考えられていたようである。

## 2. 氏家町勝山・“環状列石”

勝山遺跡は、勝山城跡三の丸地区とその南側付近に当たり、従前は堂ツ原遺跡と総称されていた遺跡の部分的な別称である。前述のように昭和44年4～5月に発掘調査が行われ、集石遺構群2カ所＝Ⅰ・Ⅱ(第5図)、住居址＝Ⅲが見つかったが正規報告書が公刊されておらず、内容を正確に把握することが困難である。昭和57年度、氏家町史の発刊に当たりこの調査内容は看過することができないので、遺構実測図は欠いたまま、写真を基に出土状況を整理し下記に記載することとした。

海老原郁雄「第一章原始時代 三、縄文晩期文化と堂ツ原、勝山遺跡」氏家町史上巻 氏家町 昭58.3

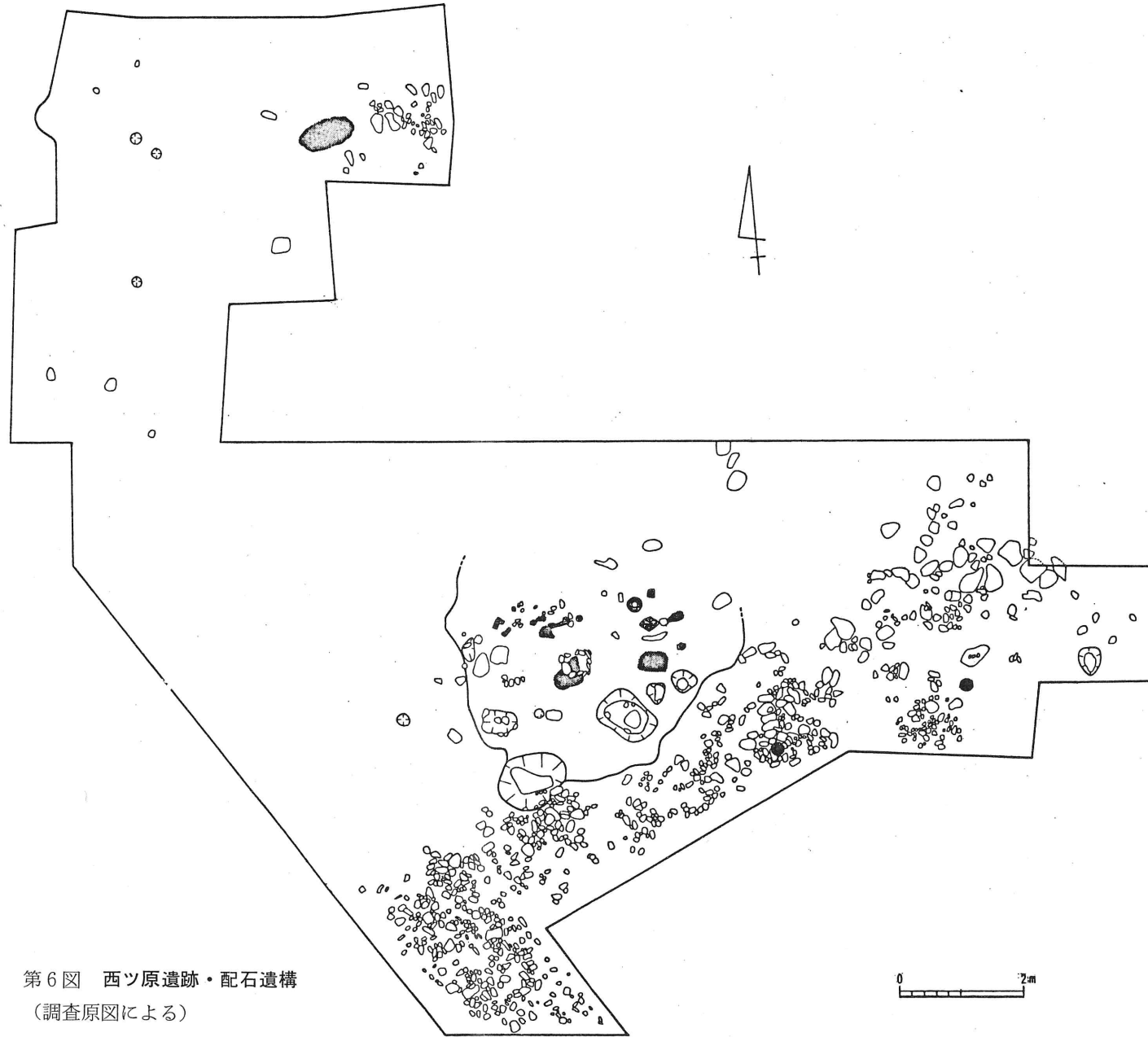
ここに再掲するのは、前出文献において埴静夫が記述した“環状列石”で、「長径約18m、短径約16m 配石帯約2～3mを呈する外帯と、径4mほどに配した内帯」と称する集石群である。これを1号集石遺構と仮称し、若干の検討を加えてみる。写真から判別できる集石の小単位(写真③)とそれらの関係位置を示す全景(写真④)を参照。



第5図 勝山城跡と昭44年度発掘地点

Ⅰ 1号集石遺構群 Ⅱ 2号集石遺構群 Ⅲ 住居址  
(「日本城郭大系4」新人物往来社)の挿図に追図)





第6図 西ツ原遺跡・配石遺構  
(調査原図による)



勝山遺跡・集石遺構全景



↓  
a

c

→  
"内帯"

d

→  
e



c  
 a c  
 b e  
 b d

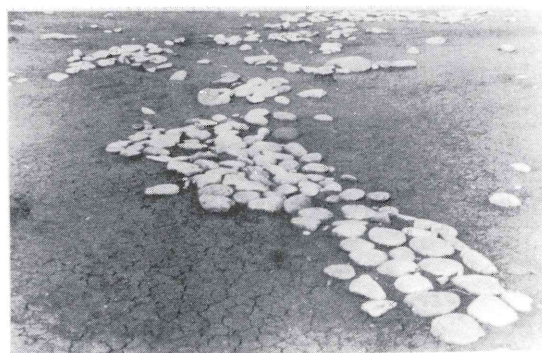
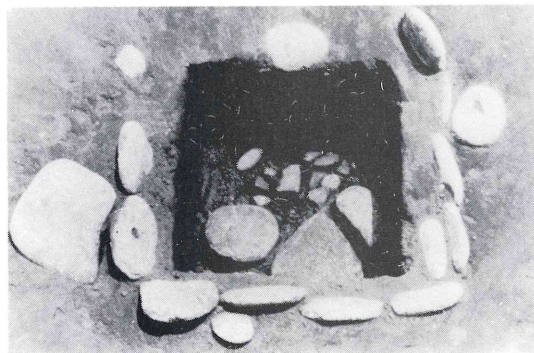
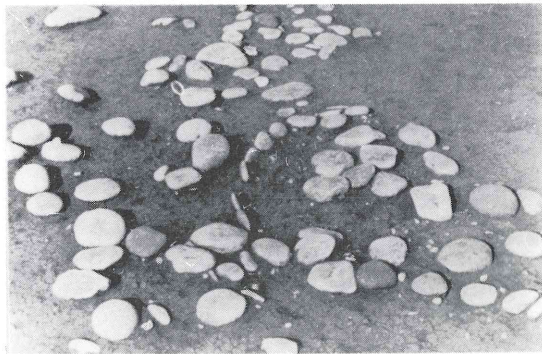
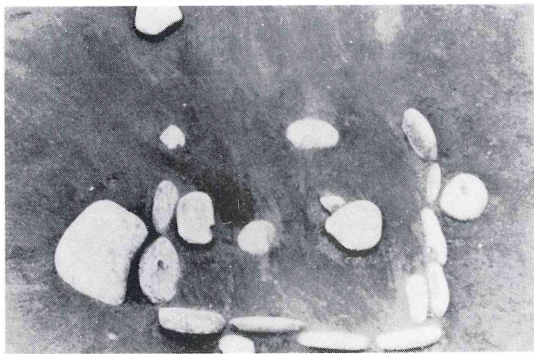
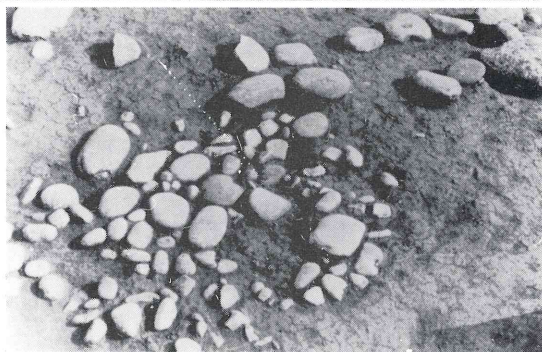
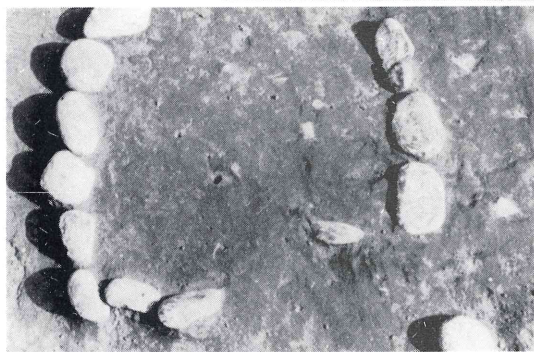


写真4 勝山遺跡・各集石遺構（氏家町）



集石の小単位として分るものは、a, b, c, d, eの“外帯”にあるものと、“内帯”に当たる部分との5ユニット。全景ではbの位置が不明。

**集石 a** 塊状の河原石を連鎖し方形の石囲いとして配列。長軸は北を向く。側石が抜かれ四辺が連結していない。外見からは炉である。

**集石 b** 平らな河原石を立て方形の石囲いとして配列。内部を切開すると、小礫と共に大小の河原石が数個埋積していた。これらの石は、石囲い区画部分に積み置きした河原石が陥没したものと考えられる。切開は試掘であり、掘り方を示すものではない。位置不明。

**集石 c** 大小の河原石が楕円状に集中する。石は塊状で敷き並べた感じが無い。中央部に余白部があり、その下位に土壌が存在するものと予測される。この集石に接して直線的な二列の配石があるが相互関係は分らない。

**集石 d** 平石を帯状に敷き並べた集石で、直線的な形状。内側二列の石に両側を画するような長い石が並び、この石列の延長方向に不整形の集石帯が接続する。このひとまとまりで一単位と考えられるが、概形はかなり変形しているようである。

**集石 e** 平らな面を上面にした河原石の集石ユニット。石はまばらで、原形に近いといえるかどうか。集石の中央部に、平石を立てて半円形に並べた部分がある。

“内帯”の集石 不整形の広がりをもつが、河原石を平らな面を上面にして相接して敷設している。抜かれたり動かされたりしているらしく原形を推定し難いが、発掘時に円形をなしてはいないようである。

この他にも、全景の最奥手の細長く写っている集石や左手手前の集石などの単位が見られるが判然としない。集石の各ユニットには共通性がなく、いくつかタイプ分類できそうである。

まず、集石 a は石囲炉で住居址に伴うものではないか。長軸方向に試掘切開したというのが状況不詳。「敷設式配石墓」かとも考えたが、単なる石囲炉と見てよさそうである。

集石 b, 集石 e は平石の外画があり方と円で形状は異なるが、下面に土壌をもつと考えられる。墓墳の可能性が高い。集石 c も外画施設はないが、積置した集石を伴う土壌墓ではなかろうか。

集石 d, “内帯”集石は、原形からの変形損壊が甚しいがそれぞれにまとまりをもつ比較的大きな集石遺構と考えられる。集石を伴う土壌墓とは質的に異なる配石遺構といってよく、「帯状の突出部が付属する」と記述された柄鏡状遺構の在り方と相似している。つまり、この2つの集石もまた柄鏡型住居と理解してよいのではないか。

これらの集石エリア (I) で出土遺物に、晩期土器と共に小型石棒 (5点、いずれも半折) があり、集石 b・c・e など集石土壌墓と想定される遺構との関連性が考えられるも

のの不確実である。

以上のように、既発表の「環状列石」の中には、中期末～後期初頭比定の柄鏡型住居に擬せられる敷石遺構、晩期比定の集石土壌墓と思われる墓墳、住居に伴う石囲炉などの各種が入り混っていることが予想され、累加した結果の集石群であるといえる。従って、これらの集石単位が同時的、連続的に形成されたかの如き印象を与える「環状列石」とするとならえ方は場あたりの表記であり、誤解を招きやすい。

### 3. 那須町西ツ原・配石遺構 長谷川 操 (湯津上村歴史民俗資料館)

西ツ原遺跡は、那須郡那須町大和須に所在し、黒川に注ぐ三蔵川と大和須川との合流によって挟まれた半島状の狭隘な河岸段丘面に立地する。標高 230 m を測り、三蔵川との比高 9 m、大和須川との比高 4 m を測る。

宇都宮大学郷土史研究班により、昭和29年8月に発掘調査が実施され、竪穴住居跡1軒と配石遺構が検出された。

本遺跡の配石遺構については、昭和30年に刊行された報告書(注1)等に概要が記されているが、偶然にも報告書未掲載の発掘調査区全体図(第6図)が発見されたので、報告書を要約し全体図からの私見を補助的に加えて、概要を述べたい。

配石遺構は、調査区の東から南にわたって検出されたが、全容は明らかにされていない。検出部分に限った規模は、幅約 2 m、長さ約 5 m (全体図を見る限りでは約 12 m にも及ぶ) を測り、帯状になっている。全体として、半島状の河岸段丘面を横断するように配置されている。東側に検出された配石は、径約 20~40 cm の河原石でやや粗く配置されているが、南側の配石は、それよりもやや小型の河原石が使用され、密に配置されている。地表からの深さは若干異なるものの、報告書の挿図から判断するとレベル的には両者ともほぼ同一レベルにある。

さらに全体図から細部の状況を検討してみると、「人工的」「意識的」に配置されたと報じられているように一見乱雑に見える配石もいくつかのまとまりがあるように看取される。特に小さい河原石で構成された配石は、径 1 m 程度の小グループがいくつかまとまったものと見ることもできそうである。

出土遺物については、「千網系土器」が配石遺構中から若干出土していることが報じられている。特に小さい河原石で構築された配石群のうち図示した位置より「千網系土器」の底部が出土しており、構築時期を示唆する資料となっているという。(注2)

この種の配石遺構は、多くの場合土壌と深いかかわりを持っている。本遺跡の配石遺構も配石土壌墓であったと考えられる。但し現時点ではそれを検証することはできない。構

築時期について、配石遺構に伴う遺物は極端に少ないことが多く、時期決定が困難である本遺跡の場合もその例に洩れないが、縄文時代晩期の所産とみて大過ないとする。

なお、末筆にはなりましたが、未発表の図面を公表するにあたり御快諾をいただいた渡辺龍瑞氏、埜静夫氏、小林敏雄氏、また公表の機会を与えて下さった海老原郁雄氏、岩上照朗氏、上野修一氏に感謝の意を表します。

註1 宇都宮大学郷土史研究班『栃木県那須郡伊王野村西ッ原遺跡発掘調査報告』

昭和30年

渡辺龍瑞 「西ッ原遺跡」『栃木県史』 資料編 考古一 昭和51年

註2 註1 報告書では「斜格子または斜状の撚糸紋」が施された土器、渡辺龍瑞氏は『栃木県史』で「千網C<sub>1</sub> 類に近い土器」と述べられていることから、網目状ないし斜行する撚糸文の施された縄文晩期の粗製土器と思われる。

#### 【追 記】

本項「那須町西ッ原・配石遺構」は、特に長谷川操氏の協力を得て掲載した。

昭和59年秋、氏が宇都宮大学保管の考古資料の整理中に偶々第6図の原図を発見し、再トレースしたもので、県内で僅少発掘例の遺構であり、調査状況は不詳だがせめて図だけでも公表することに意義があろうかと考え、氏に要請した次第である。銘記して謝意を表したい。 (海老原)



上河内村文化財調査報告書第5集

古 宿 遺 跡

—栃木県河内郡上河内村今里—

昭和61年3月31日

発 行 上河内村教育委員会社会教育課  
栃木県河内郡上河内村大字中里字大室 182-1  
TEL (0286) 74-2233

印 刷 株式会社アカフダ

宇都宮市教育委員会